



要るかとの
塞装甲騎兵团

香集 夏

1章の目次

- 1 目次
- 2 登場人物達
- 3 投稿者不明の動画
- 4 「リノ」ではなく「利之（としゆき）」
- 5 1両=10万円として計算してください。
- 6 リノ専属工兵
- 7 デミグラスソースの失敗
- 8 本当の弱肉強食の始まり
- 9 消耗品
- 10 ボスは、弟より妹を愛す
- 11 罪を憎んで人を憎まず？
- 12 契約者規約
- 13 私、壊れちゃうかも知れないよ
- 14 計算上存在する世界
- 15 警告メッセージ
- 16 伊織はいつも本気モード♪
- 17 秘すればこそその力
- 18 畏敬の保持
- 19 空飛ぶ落ち武者の突入
- 20 狂気を味方に・・・
- 21 鬼、喜怒哀楽の具現化？
- 22 伊織、若干引く。
- 23 「鬼」は「鬼」
- 24 工兵の回収成功
- 25 俺の嫁か、二刀流
- 26 風の知らせ
- 27 楽園に飛び込んだ【1722】
- 28 や・・・柔らかい・・・
- 29 イキナリ？
- 30 好きな言葉は、確定要素です。
- 31 俺、恋、焦がれていたのに・・・
- 32 これも鬼の形？
- 33 投稿者不明の動画2

登場人物達

チーム織姫 & 彦星 混成部隊

チーム織姫

リノ（14） 一応、主人公。狙撃担当。射撃の腕は神業。
伊織におもちゃ扱いされてる少年。伊織に異性の対象として認められたい。

伊織（14） チーム織姫 & 彦星の現場指揮担当。狙撃護衛担当

佐織（14） チーム織姫 & 彦星のマネージャー。狙撃担当

チーム彦星

五人兄弟 伊織に誘われて、賞金稼ぎに参加。

篤師（18） 長男 近接戦闘担当
チーム織姫 & 彦星のボス ボスだけに器は大きめ。

武史（15） 次男 近接戦闘班担当 何かと伊織とリノに突っかかる。好戦的。二刀流。

博司（14） 三男 近接戦闘班担当 都市伝説のイメージにこだわりも見せる。芸術家肌。

康悞（13） 四男 近接戦闘班担当 楽しい事が大好き。何かと陽気。

忠志（12） 五男 佐織の狙撃護衛担当 佐織を慕っている。

【1722】 リノ専属の工兵、工兵は黒い覆面マスクをつけているため顔は不明。
しっとりした優しい声をしている。

投稿者不明の動画

『マンションの一室』【投稿者不明動画】

最初に見えた甲冑を纏った武者は、予め家具の影に潜んでいたかの様に見えた。二人目の武者は、明らかに開くはずのない壁からスーと姿を現し、まるで3D映像か霊魂が、物理的法則をまるで無視して姿を現したかのようだった。

二人のボディーガードは、すぐに護衛対象者の壁となり、拳銃と軽機関銃で応戦したが、武者の甲冑は弾丸を弾き飛ばし、武者が振り下ろした刀で、二人のボディーガードは斬殺された。

飛び散った血で、カメラのレンズが赤く染まり動画は終わっていた。

この動画はネットで話題になったものの、警察は「最近、刀による殺傷事件は起きていない」とコメント、事件性を否定した。

ネットでは、トリック説やCG説、落ち武者の呪い説など、その種の都市伝説として静かに広まっていった。

「リノ」ではなく「利之（としゆき）」

『図書館の学習室』【リノ】

「リノ君だよな？」

背後からひざをカックンとされ、倒れこむ僕に誰かが声をかけた。

もちろん声の主はカックンした犯人に違いない。

僕は頭が良くなる成分が入っていると噂の、

まだ半分も飲んでない炭酸ドリンクを辛うじて死守しながら答えた。

「違います」

僕の名前は「リノ」ではなく「利之（としゆき）」だ。

そして、僕の事を「リノ」と呼ぶ人間は限られている。

「久しぶり、道場に来ないから心配してたんだよ」

「来年は中三だし・・・受験に専念しようと思って・・・」

学区で、一番偏差値の高い私立の女子中の制服。

声の主は去年まで同じ弓道場に通っていた伊織だ。

今まで弓道着姿しか見たことはなかったけど、

伊織のブレザーにスカート姿は初めてだ。

そして、下から見あげる僕の視線に伊織は気にする様子はなかった。

まだ子どもだと思ってるんだ。

「勉強ねえ・・・リノ君、あなたは私のおもちゃなんだから、私に遊ばれてればいいのよ」

お・・・おもちゃ！人ですらなかった・・・うん、今更驚くことでもないか。

物心ついた時から、おもちゃ扱いだったのは事実だが、僕だってもう中2だ。

断固とした態度で抗議する時期に来てるはずだ！

僕が、そう決意した瞬間、窓の外から爽やかな風が吹き、伊織の制服のスカートかひらりと・・・

伊織の柔らかそうな太ももの奥に、小さなリボンのついた白いパンツが見えた。

・・・僕の決心は揺らいだ。

僕の定義によれば、美少女はそのレベルが上がれば上がるほど、パンツの見える確立が下がっていく。

100点満点で言えば、80点台からほぼ見ることは出来なくなる。

まして、他校にまでその可愛さが知れ渡っている伊織のパンツが見える確立など、ゼロに等しい。

しかし、おもちゃとしてなら出来る。

すべてのプライドを捨て去り、おもちゃに成り下がれば、それが可能なのだ。

何故なら、おもちゃごときにガードは掛けない。

少年よ、プライドを捨て、欲望に生きるのだ・・・言ってるなんか、情けない。

1両 = 10万円として計算してください。

『高層マンションの一室』【汐留の青木係長】

自分の名前が、賞金首としてネットの掲示板に載っているのを見た時は、さすがに嫌な汗が背筋を流れた。

自分の首にかかった懸賞金が1両。

「大体、1両とはいくらだよ」

男は今の自分にとってどうせもい類の言葉を吐いた。

しかし、とりあえず

掲示板に載せられたリストの一番上の名前をコピーして、その名前を検索してみた。

検索結果を見たとき、男は力なく笑った。

ある程度予想していた事だが、リストの一番上の奴は、何者かに斬殺されていた。

殺された奴の事を笑ったのか、これからの自分の人生、もしくは、これまでの自分を笑ったのかは自分でも解らなかった。男は一人、涙を流しながら笑った。

掲示板には、

「1両 = 10万円として計算してください。」

の文字が

「10万？俺はたった10万で殺されようとしてるのか！」

そう思うと男は憤死しそうになった。

『高層マンションの空き部屋』【リノ】

女子寮から慌てて出てきた伊織は、ジャージにTシャツの肌寒い格好だった。

賞金首の所在情報が、急に入ってきたためだ。

お風呂上りなのか、髪は濡れたままだったし、いい香りがした。

(そして、多分ノーブラ、勇気のない僕はそれを確実な情報として確認できないでいる)

そして、その姿に、剣道部の5人兄弟は落ち着きがない。

佐織はそいつらを「バーカ」って顔で見た後、始めて来た僕にこの場所を説明した。

「ここは、いくつもある武器庫の一つよ」

「いくつもあるって!? いったい佐織さんたちは何者? 女子高生だよね」

僕の驚きと質問に、ジャージ姿の佐織は可愛く首を傾げた。

知ってるくせに! 知ってるくせに! 色々知ってるくせに!

駄々をこねても仕方がないので、これ以上の質問をやめた。

しかし、組織力が賞金稼ぎってレベルか?

今、ここには僕と伊織・佐織と剣道部の5兄弟以外に、黒い覆面マスクを被った「工兵」の皆さんが10人前後、慌しく第一波攻撃の準備をしていた。

黒い覆面のせいで、顔は見えないけど、体つきが女子だ。

伊織の女子寮の子たちだろう。多分。

僕と同じくらいの背の工兵が、

綺麗に磨かれたリボルバーに弾を入れた。

「私、顔は見せられないけど、リノ君の専属の工兵だよ、よろしくね」

顔は見えないけど、しっとりとしていて可愛らしい声。

「こちらこそ・・・」

「この弾は、玉鋼弾と言って、日本刀と同じ素材で出来てるのよ。

鉛弾と違って、鉄だから環境にも優しいし、次元も超えられる。

ただ鉛弾に比べて、貫通力がありすぎて殺傷力は劣るけど・・・」

可愛い声で「殺傷力」とか言われると、ここがまともな所じゃない事を実感してしまう。

「はい、じゃあこれは防弾チョッキ」

工兵はそう言いながら、僕の防弾チョッキのチャックを上げた。

「この防弾チョッキにはちゃんと、リノ君を守ってあげてねって、願いをかけときました」

か・・・可愛い、しっとりした声の女の子。

黒い覆面マスクをつけて解らないけど、絶対可愛いはず。

「もう、知ってる人が死ぬのは見たくはないから・・・。」

しっとりした声の女の子は付け加えた。

「・・・ん？」

僕の心は、なんかしっとりした。

デミグラスソースの失敗

『茶屋』【佐織】

「リノ君、どうして逃げようとするの？」

伊織は逃げ腰なりノを捕まえて、玩んでいた。

剣道部の5人兄弟の、リノちゃんに向けられた陰険さを帯びた視線。

そりゃあ逃げたくもなる。

伊織は、他校にも知れ渡るくらい的美貌。

男なら多かれ少なかれ恋心を抱いてるに違いない。

それにしても、スポーツマンシップのかけらもない陰険な視線。

うわっ、5人そろって、何かを吹っ切るように、カツ丼に貪り付いた。

情けなや。情けなや。

「リノ君、あ〜ん」

伊織は今まで口の中で舐めていた苺飴を、リノの口に入れようとした。

「よ・・・よくも」

叫んだのは、2男の武史だった。それを他の兄弟が慌てて止めに入った。

「落ち着け兄者」

兄者って、いつの時代よ！

「何、私の苺飴ちゃんを食べれないって言うの！」

伊織は、閉ざされたリノの口に無理やり苺飴を押し込んだ。

「・・・無念」

武史は言葉にも出せず、ネットで呟いた。

情けなや。情けなや。

「さあ、晚餐は終了・・・作戦会議始めるよ。この前、デミグラスソースが失敗したわ」
もたらされた情報に、一斉に視線が私に集まった。

「デミグラスソースって」

「リノ君は知らなかったね。この辺りを仕切ってる賞金稼ぎのグループ、ソース一派のグループよ」

「狙ってたのは、1両の賞金首“夕留の青木係長”」

「ザコキャラじゃないか！」

「ザコキャラのくせに、軍事警備会社にボディーガードを頼んだのよ。それを知らずに、油断したのよデミグラスソースは」

「で、ソース一派の権利行使期限は？」

リノのほほをツンツンしながら、伊織が聞いてきた。

「今日の2200時まで」

「たった1両の賞金首なのに、軍事警備会社を相手にするのってハイリスクローリターンすぎない？」

慎重派の篤師らしい発言ではある。

「傭兵なんて私たちの前では、これみたいなものよ」

伊織の指した先では、お好み焼きの上の鰹節がゆらゆら揺れていた。

伊織の例えが何を意味するかは判らない。たぶん、「これくらい弱そうじゃない」的な事だろう。

にも関わらず、相当深読みに深読みを重ねた篤師と武史は

「そう言う事が、そこに真実の一端を垣間見た気がする」

「確かに」

凜とした顔立ちの伊織が言うと、深みのある様に聞こえるけど、あの子、そんなに深くはない。

本当の弱肉強食の始まり

『賞金首射程圏内地点』【佐織】

私、伊織、リノ、そして、5人兄弟（篤師・武史・博司・康徳・忠志）が揃った部屋に、賞金首の音が響いた。

「俺たちが死んだ後、10年後か20年後か知らんが、俺の関知しない世界がどうなろうと知った事ではない。俺の関知しない子どもが汚染に浸ろうと、早死しようが知ったことじゃない。いや・・・逆にそれだけの犠牲を払っているからこそ、今の俺にこれだけの金が流れてきてるのかも知れん。大事なのは今だ！今、俺の元に流れてくる金だ！とんでもない額の金が俺の元へと流れてくる。賞金稼ぎの奴らだって、金のために俺たちを殺そうとしてるんだぜ。ふっ！それこそ偽善だ！何が正義の鉄槌だ。笑わせる！金・・・そしてそれに元づく権力によって、偽善者のテロリストどもを汚濁の中に突き落としてやる。」

酔っ払っていたのだろう。やたら饒舌な声が、パソコンのスピーカーから流れてきた。まじめそうな感じだったが、酒に酔うとこんなもんだ。

今、私たちが居る場所は、とある秘密のアジト。ビルやマンションのテナントの入居率が下がり続けている現在。この種の秘密のアジトを見つけることなんて容易い。そして、ここは賞金首を射程圏に収める位置にある。

冷たいストロベリーシェイク一気飲みによる頭痛から解放された伊織が言った。

「あまり時間がない・・・こいつらを野放しにし続けたらその分、未来は汚される。急がないと・・・」

まだあどけなさが残る伊織の声。好い音色・・・

「後・・・」
伊織の弦きに、5人兄弟の視線が伊織に集まった。
「後・・・リノ君の調教も急がないと・・・」

「な・・・何をいきなり言い出すんですか！」

リノのツッコミに、伊織は動じない。

さらに篤師までマジな顔で「手伝おうか？」と。

「ううん。いいの。リノ君の体は私だけのおもちゃにしておきたいから・・・」

伊織はあどけない顔をして言った。

逆にその子どもじみた表情が、調教を本気で考えているのかも知れない。

それにしても、伊織の変態視線にキョドる目のリノ君が、可愛い。

そして嫉妬する五人兄弟・・・なんかウケル。

・・・とウケてたら、賞金首の声がまたした。

「なあーそうだろう！世の中弱肉強食なんだよ！

力のない愚民どもの犠牲の上に歴史は作られてきたんだ。

それが歴史の常識なんだよ！解るか常識よ！」

賞金首の発言にうちのボス、篤師が反応した。

「そのとおりだ、世の中は弱肉強食、それを奴に俺たちが教えてやろうぜ！」

たまにボスとして自覚する、篤師。嫌いじゃない。

チームが1つにまとまろうとした瞬間、伊織のおもちゃから解放されたリノが言った。

「弱肉強食・・・食うの？」

「食うよ・・・こいつら鬼だもん」

ドS伊織の言葉に、5人兄弟は目をそらした。

「なぜそらす・・・大丈夫だよ、ほら角だっついでないから」

と私は慰めてみた。

最近、彼らの家の蔵で、鬼から連なる家系図が見つかったのだ。

家系図なんて、昔話の類なのに・・・こいつらは気にしてる。

馬鹿じゃないの。しかし、こいつらの強さは鬼並み。

消耗品

『高層マンションの空き部屋』【武史（本名は次郎）】

兜と甲冑を装着すると、雄としての魂に火がつく。

今俺が着ている甲冑は、戦国期のものとは違い油圧による補助が付いている。

それにより1、5倍から2倍のパワーとスピードで動くことができる。

100メートル走なら軽く10秒を超えるレベルだ。

最初は、その動きに身体と頭が付いていけなかった部分もあったけど、

俺は慣れるのは早かった。

戦うために生まれた様な俺くらいになると・・・

「そこ自己陶酔しないで説明を聞く」

「ねんでやねん」

俺のツッコミは、「なんか違う&価値なし」と見なされ、佐織に軽くスルーされた。

「懸賞金1両の賞金首とは言っても、軍事警備会社を雇ってるから気をつけて、

特にリノ君は初陣だから焦っちゃだめよ」

佐織の説明に、リノは緊張しすぎた為か、目をキョロキョロしていた。

大丈夫か、こいつ？

伊織が言うには、弓道では100発100中での的に当てるらしい、

しかし、弓道と狙撃銃とでは撃ち方も違うし、標的は生きてるし動く。

「軍事警備会社・・・当たるのはこれが初めてだな」

リノとは対照的に落ち着いた顔の篤師が言った。

狙撃班のリノが軽装なのに対して、

近接戦闘班の俺らは甲冑を纏ってかなりの重武装。

なんか男としての差を感じるぜ。

「うちらザコ専門だったもんね・・・佐織が慎重すぎるから」

「私はただ・・・みんなの」

肉食の伊織と草食の佐織がもめ始めた。

やれやれ・・・俺が仲裁してやるか

「俺たちの身の危険を案じてくれるのは嬉しいが、俺たちは賞金稼ぎだぜ、傷つく事なんて恐れてはいない」

「あくまでリスクマネジメントの問題なんだけど」

あっ、佐織がスルーしなかった。それだけでもラッキー。

「要するに、いくら賞金稼ぎが消耗品だからって、無限に浪費する訳には行かないって事」

伊織のこの発言には、さすがに傷ついた。

「消耗品って、俺たちはそんな扱いなのかよ！少なくとも仲間だと思っていたのに」

さっき傷つくのは恐れないと言ったけど、心の傷は別腹だぜ。

「はあ～」

さすがに篤師もため息をついた。そりゃそうだろう。

「消耗品、それは正しい見方だと思う。
兵隊なんて所詮消耗品だしそうじゃないと、作戦なんて立てられない。
それを理解した上で、俺はここにいる。」

なんでカッコよさげな事言うんだよ！

「さすがボス、解ってるじゃない。どこかの口だけ男とは訳が違う・・・」

酷い・・・伊織、可愛いけど、言動が酷い。

「でも、消耗品だけど、少なくとも同じ場所で戦ってる戦友だとは思ってるよ」

酷い・・・伊織、可愛いけど、「戦友だと思ってるよ」って、ウルッと来たじゃん。

佐織が、「単純・・・・」って声にならない声で言った。俺のこと？

『高層マンションの空き部屋』【佐織】

伊織は楽しそうに言った。

「それじゃあ、妥協案。

とりあえず今回は軍事警備会社の出方を見るためにも、狙撃大会を開催しましょう」

狙撃大会・・・狙撃の対象はもちろん賞金首とそのボディーガード。

そう生きた人間だ。それを狙撃大会だなんて、そんな遊び感覚的な言い方は無いと思う。

時々見せる伊織の残酷性・・・しかし、奴らを殺さないと、私たちのささやかな未来すらない。

奴らに対する残酷性が、私たちの未来を救う。

それに私たちを人間扱いしなかったのは奴らの方だ。

同情する必要はない？

「武史く～ん、不満なの？狙撃じゃ負けるとかってんだ？初陣のリノ君に？」

「俺がこんな小動物に負ける訳がないだろ」

武史に睨まれたリノは、本当に小動物みたいに怯えていた。

「はあ～、男なら睨み返せよ！やる気失せるぜ。リノちゃんよー」

「面白そうじゃない。やろうよ」

「面白けりゃいいってもんじゃねえぞ！康徳、これは命懸けの戦場だぞ」

そう、武史の言う通り、これは命懸けの戦場。

「それじゃあ多数決・・・えーとリノ君は私の味方よね」

リノが意見を言う前に、リノは伊織に抱き寄せられ、伊織の胸の中で意思を喪失。

「ボスは？」

ボス・・・篤師の事だ。

一応、年長の彼が、チーム織姫&チーム彦星混成部隊のボスだ。

5人兄弟の長男なだけあって、頼りがいがある器がデカイ。

チーム織姫を妹のように可愛がってくれるありがたい存在だ。

故に、可愛い妹には甘い。血のつながった弟より、血のつながらない妹のはず。

「俺は問題ない」

やっぱし。ちょいエロいかも。

「康僊は賛成でしょう。博司と忠志は？」

博司は、武士をチラッと見て

「気に入らない」

博司に続いて忠志も

「僕も気に入らない」

その言葉に武史がにやけた。

「佐織は？」

「敵がどの程度なのか解らない以上、むやみに突っ込むよりましね」

「じゃ～あ、賛成ね。4対3で狙撃大会開催決定ね」

いつも私が賛成すれば、こうやって伊織の意見は採用される仕組みになっている。

こうして残酷な狙撃大会は開催された。

罪を憎んで人を憎まず？

『心境』【佐織】

遠い昔、若い兵士が言った。

「彼らの過去の罪を許す。今は未来さえ在ればいい。」

と、罪を憎んで人を憎まず。

人としては立派だと思う。

しかし、それでは未来は守れない。

心の鬼を目覚めさせ、悪を滅ぼす以外、未来は守れない。

契約者規約

『めるかとの要塞装甲騎兵団規約』

一般人に危害を加えない事
懸賞金以外の利益を追求しない事
要塞の秘密は何よりも優先する事
裏切り者には死を与える事
身柄を拘束された場合は、速やかに意識を沈める事

以上の項目に違反した場合は、
減点、もしくは除名のペナルティーが科せられます。

『チーム織姫&彦星規約』

本名を口外してはならない
作戦時の下着の色は赤を着用すること
各自のお誕生会には必ず出席すること
食事・服装はマネージャーの指示を受けること
チーム内での恋愛は禁止

以上の項目に違反した場合は、
女王様預かりとする。

ボス（チーム責任者）は、篤師が担当する
マネージャーは、佐織が担当する
作戦指揮は、伊織が担当する

兵種

近接重装甲
篤師・武史・博司・康徳

狙撃1班
狙撃・佐織

護衛機銃・忠志

狙撃2班

狙撃・リノ

護衛機銃兼現場指揮・伊織

私、壊れちゃうかもしれないよ

『射撃ポイント01』【リノ】

まだ、数値が合わない……。

「リノ君、赤いパンツをはいて来た？」

「ん？」

「もう、規約に書いてたでしょう、
内のチームの下着は赤で統一してるって、ほら私だって」

そう言われて、なんのためらいもなく、伊織は自分の赤いパンツを見せてきた。

お尻のラインがめっちゃ好みだ……てことは置いといて。

この簡単さが、僕を異性として、男として認めていない証かも
こういう事が多々ある……親しすぎた幼馴染の悲劇だ。

「仕方ないわね、私の赤いパンツはく？そ・れ・と・も・被る？」

「なんで被るんですか！」

「私のパンツを被れないの？……こういう時、幼馴染って哀しいよね」

「幼馴染は、ぜんぜん関係がありません。」

「もうリノ君はパンツを被れない年頃になっちゃたんだね。

あの頃はいつも被ってたのに……」

「あの頃も今も被ってないです」

「……」

「何ですか、その沈黙」

「見て見ぬ不利……私も大人になったってことね」

「何を！」

「あの5人兄弟なら、きっと被ってくれるよ」

そりゃそうでしょう！ケダモノのあいつらなら喜んで被るでしょう。

大体、この星に、こんな美少女のパンツを被りたくない男子なんかいるはずはない。

……と思ったけど、口には出さなかった。

言ったら被らされそうだったし……被りたくないわけじゃないけど、

誰かに見られたら僕の人生はおしまいだ。

そんなこんなで、伊織が提示した妥協案は、
伊織が持ってきた赤のトランクスに僕が着替えることだ。
ちなみに、伊織は赤いトランクスと、赤い禪を持参していた。
時々、伊織の趣味が解らなくなる。

「あっ、リノ君はスコープから目を離しちゃだめ、数値がいつ合うか解らないんだから
ふふふ、大丈夫よ、私、親戚の子のオムツ替えたことがあるから」

し・・・親戚の子のオムツ！

ショック！

それほど僕を、子ども扱いしていたとは！

「パンツくらい自分で着替えられます」
「リノ君は、自分でパンツを着替えてる最中に、賞金首が反撃してきて、
仲間が死んだっていいって言うの・・・
今は、辱めを耐えて、仲間を守ることが男ってもんでしょう」

うん、理屈がむちゃくちゃだった。そもそも、赤いパンツに拘ったが故の結論だろ。

「私とリノ君、今更・・・恥ずかしがる仲じゃないでしょう」
「それなりの年齢になると恥ずかしくもなるよ」
「それなりの年齢になっても、リノ君はずっと私のものよ。
それに物心付いたときから一緒にいる私たちって、
同じ年頃の子の男女関係とは、比べ物にならないくらい親密でしょ。
それを今更・・・この距離感を引き離したくない。
もしリノ君との距離が離れてしまったら、私、壊れてしまうかもしれないよ。」

伊織が壊れてしまうかもしれない？

意外な言葉だった。

伊織は、何事にも動じない安定感のある子だと思っていた。

しかし、伊織にとって僕が必要な男って事だろ。

僕がにやけそうになると・・・

「おもちゃを無くした子供が、泣きじゃくるように・・・私、壊れちゃう」

そう言う事か・・・

僕の抵抗もむなしく、僕は深夜のビルの空テナントで軽く辱められた。

「ファッションって、その人や組織の意思が込められるべきなのよ、
そして、この赤のパンツの赤は、血の色の赤。
私たちがどんなに大義名分を唱えようとも、
所詮、血に染まった殺し屋に過ぎないって意味よ・・・」

伊織の説明が聞きながら、僕は伊織が始めて生理を迎えた日の事を思い出した。

「一緒に、お祝いして」

と伊織に言われて、僕は意味も解らず伊織と一緒にコンビニで買った赤飯のおにぎりを一緒に食べたっけ・・・

あのころは微笑ましかった。そんな時代だった。

なのに僕ら今、なぜ、こんなに殺伐とした時代を生きてるのだろうか？

計算上存在する世界

『射撃ポイント01』【伊織】

この街の物体を数式化して、
その数式の立体空間を意味する3を、
超立体空間を意味する4に変えて、
再構築した計算上存在する街。

その街では、
私たちの空間と並列もしくは直列した闇に包まれた空間が
いくつも発見された。

そこを通れば、
目の前に厚い壁があろうが、
銃撃の弾幕だろうが、
するりと通り抜けたかの様に、
目的地に到達できる。

私たちは、一種の近道を手に入れたようなものよ。
でも、その闇の空間には、未知の鬼が住む。

そして、これが鬼を寄せつけない為のお守り……。

「リノ君専用お守り、私のあれが入ってるから」

「あれ？」

「うん、あれ」

照れるリノ君……可愛い。
もうちょっと見とこ。

そして、1分後……

「闇を通る時は、絶対離しちゃだめだよ。」

照れから開放されたりノ君は、ホッと表情を緩めた。

「えっ何で？」

「鬼が棲む闇に、引きずり込まれるから」

乾いた銃撃の音が空き部屋の目立つビル街に響き渡った。

射撃ポイント02と03からの攻撃が始まったらしい。

射撃ポイント01からは、第一波攻撃には参加しない。

銃声の音も慣れてくると、大したことはない。

私に向けられているわけじゃないし・・・

そう言えば、昔行った花火大会の音の方が大きかった気がする。

「リノ君、また花火大会行きたいね」

警告メッセージ

『賞金首のマンション』【軍事警備会社社員】

警護対象者（賞金首）が見ていたテレビの画面が変わり、突然、アニメ声で音声が流れ始めた。

「私達は、めるかとり要塞装甲騎兵団・チーム織姫&彦星です。
今から、賞金首に対して攻撃を開始しますよ～
良い子のみんなや部外者のみんなは、
危ないからただちに退去してくださいね！」

ふざけてやがる。

警護対象者は、多少驚きはしたが慌てはしなかった。
そして、つかれ切った表情の警護対象者が呟いた。
「またかよ……」

我々が振り返りにしたチーム・デミグラスソースを名乗る連中も、
同じ様なふざけた警告をしていた。

「安心してください、また振り返りにしてみせます。」
私の部下の言葉に、警護対象者は「もうどうでもいい」と言った表情だ。

あんたは良くて、こちらは会社としての信頼が落ちる。守りきってみせる。

バッシ、バッシ、バッシ

窓ガラスに銃撃か？
一応簡単な防弾使用になっているが、いつまでもは持たない。

「攻撃が始まった！本部増援を求む！本部増援を求む！」
無線が繋がらない……だとしても、繋がらないと本部が気づけば増援が来るはず。
これだけのあからさまな狙撃、警察だって……見て見ぬ不利はできまい。

10分以内だ……10分以内に増援は来るはずだ。

ガッシャン

防弾ガラスが割られたらしい。でも大丈夫、窓に近づけなければ、
バズーカーでもぶち込まれば別だが、ライフル狙撃などではなんてことはない。

万が一バズーカーなどを、ぶっ放せば、一般人に被害が及ぶ。
今までの情報から、奴らは一般人に被害を及ぼした事はない。

伊織はいつも本気モード♪

『射撃ポイント02』【武史】

「第一波攻撃終了、どうすんの？増援来ちゃうぜ」

俺は現場指揮の伊織に問いかけてみた。
返答がない。戦闘中に何やってるんだ？

「おい！伊織！イチャついてんじゃねえだろうな！」

俺の問に、佐織が返答した。

「敵の増援が来るわ。その数を確認後、次元射撃開始よ」
「各個撃破じゃなかったのか？・・・てか、なんで佐織が答えんだよ！」
「それは・・・そのほら、2人には2人の事情が、いろいろあるんじゃない？」
「いろいろって何だよ。」

「さっ、完璧・・・えっ何か呼んだ？」
伊織の声だ。

「何やってたんだよ！イチャついてる場合じゃねえぞ、戦闘中だぞ」
「イチャついてなんかいいわ！ちょっと赤ちゃんプレーしてただけだよ！」
「なお悪いわ！・・・てか、作戦変更か？各個撃破じゃなかったのか？」
「こっちに夢中になってたよ。ごめん作戦変更」
「しょ・・・正気が、作戦より赤ちゃんプレーを優先したのか？」
「もちろん♪」
「なんでやねん！」
「ベタなツッコミ、ありがと」

「ちょっと待って・・・」
佐織が、口を挟んできた。

「何？」
「増援の数が半端じゃないわ。珍しく警察も混じってる。奴ら本気で私たちを捕まえる気かも」
「デミグラスを迎え撃ったから、調子に乗ってんじゃない（笑）」
「だからこの状況で、伊織！なぜ（笑）う？」
「言えないわ・・・プライベートに関わるから、ねえリノ君」

「ふ．．．ふざけんなよ！」

「ふざけてなんかないよ。伊織はいつも本気モード♪

うん、この状況から．．．とりあえずここは撤退しましょう」

「待てよ！すでに予告をいれてんだぜ。敵の数が増えたからって撤退かよ！

予告入れといて、逃げるみたいに撤退なんて、おれは嫌だぜ」

「それと．．．都市伝説の演出としてもどうかと思う。」

おっ！俺の隣で待機していた博司が発言。

頼りになるぜ！我が弟。

秘すればこそその力

『射撃ポイント03』【佐織】

もし本気で「私は異界を通れる」とか、リアルな世界で言うと、
虚言癖扱いされるのが落ちだ。

しかし、その技術がある組織が偶然保有した場合、その組織はどう使うだろうか？
軍事組織なら当然軍事技術として使うだろう。
企業なら何らかの商品を作り出したり、なんらかのサービスを提供するかもしれない。
私なら、「未来を守るために使う」それだけの事。

そして、私達はその力を維持するためには、その力を他者に知られてはならない。

私達は超能力者や魔法使いの様な特別な人間ではない。
この技術は知れば誰でも使いこなせる技術だ。

この技術の情報流出は、私達の無力化を意味する。

私達の力を守る方法は、極力情報を漏らさない事。
そして、偽装情報を流すこと。

偽装情報の内容は、私達の存在自体の都市伝説化。

常識的な人間は、いかがわしい都市伝説など相手にはしない。
そして、この世の中の主流は、そういった常識的な人間だ。

畏敬の保持

『射撃ポイント02』【武史】

俺の弟、博司は説明した。

「ネットに流れている都市伝説で俺達は、この世の者として扱われていない。鬼や霊魂・・・遠い昔の武者の遺恨、怨念、それに伴う一種の畏敬すら持たれている。もし、敵の数の多さに逃げ出したと噂が流れれば・・・ただのヘタレ賞金稼ぎのテロリストに落ちてしまう。都市伝説の重要性は佐織さんも言ってたでしょう」

さすが俺の弟、もっともな意見だぜ。

「死んで・・・本当の霊魂になりたいの？
戦いは物量よ。いくらこっちが闇を通れるとしても・・・」

伊織が、俺達の身を心配してくれるのは嬉しいが、それとこれは別だ。

「俺達は覚悟は出来てる！」

と俺はカッコいいこと言ってみた。
でも、カッコだけじゃない俺は本気だ。

「未来の為に・・・新しい時代の為に、一緒に戦わない？
と言って来たのは伊織だろ。だからこそ俺は伊織に着いてきたんだ。
伊織、命令してくれよ。今すぐ賞金首を仕留めろって！」

しかし、伊織は

「今すぐ撤退しろ」

頑固な女め。

「い・・・伊織さん・・・」

ん？・・・ヘッドフォンに声が・・・この、しっとりした可愛い声は、

確か・・・リノ専属工兵の娘？

「・・・・助けて下さい」

空飛ぶ落ち武者の突入

『射撃ポイント01』【伊織】

しっとりした優しい声が、
伊織特別仕様高音質ヘッドフォンを通して耳に入った。
乾いた心を、しっとりと潤してくれるような声。
間違いなく、リノ専属工兵【1722】の声だ。

「鬼が・・・私のすぐ近くに鬼がいます」

鬼・・・私達の空間と並列もしくは直列する、
闇に包まれた空間で徘徊している生き物。

めるかとの要塞の工兵たちは、
闇の空間内で日々要塞増強に従事している。

「今、どこにいるの？」

「賞金首のいる空間と直列する空間です」

リノ専属工兵が、なぜ単独行動で、そんな前線に・・・
迷ったの？

それとも初陣のリノに、手柄を立てさせたかったから？
今は、それを詮索しても、しかたがないか・・・

「落ち着いて、【1722】 鬼からあなたは見えない。
冷静に鬼から距離を取ってれば危害は加えられない」

「は・・・はい」

「もう声を出さないで、鬼に気づかれる」

「・・・」

工兵の作業着は、
武者の甲冑と同様の特殊コーティングされているから、
鬼は視認できない。

「みんな、作戦変更、工兵の身柄確保を最優先」

「俺達、すでに甲冑来た状態だから、今すぐ出れるぜ」

「今すぐ救出に向かって」

「了解」

「リノ君、佐織、狙撃は狙い続けて」

「了解」

狙撃銃のスコープからは、
闇の空間を見ることは出来ないけど・・・何か合ったときの為。

射撃ポイント02のビルの屋上射出機から、
甲冑を纏った武史と博司が夜空に向けて射出されたのが見えた。

月光に照らされた、空飛ぶ2人の武者。
これを見た誰かによって、また都市伝説が更新されるかも。

ネットでは、いつもなぜか落ち武者呼ばわりるから、
空飛ぶ2人の落ち武者か・・・
しかし空飛ぶ落ち武者って、博司の演出的にどうなんだろう？

空飛ぶ2人の落ち武者は、空中でふっと姿を消した。
2人が、その地点にある闇の空間に突入したのだ。

射撃ポイント04からも、篤師と康偲が射出され、
同じように闇の空間に突入して行った。

同時刻、軍事警備会社の増援部隊が現場に到着した。

狂気は味方に・・・

『射撃ポイント01』【伊織】

今、思いついた事は、自分でも恐ろしい考えだと思う。
自分が、こんな事を思いついた事自体が恐怖の対象。

でも、優先すべきは、味方の安全と目的の遂行。
その行為自体に、正義や倫理性や人道的配慮はいらない。

私の判断に、要塞の運営はどう判断するだろうか？
都市伝説の演出は？

博司が言ってた通り、私達が
「この世の者ではない」
扱いを受けているのであれば・・・

「殺戮と恐怖はカリスマ性を持たせる」
マキャベリも、それっぽい事言ってたっけ・・・

だったらこの場合、正解。

「リノ君・・・」
狙撃銃で狙いを定めているリノ君に声をかけた。
「なに？」
「私がどんな嫌な奴になっても嫌いにならない？」

リノ君は、「何、言ってるの？」って顔をした。
そして、言った。
「僕はこれ以上、伊織ちゃんを嫌いにならないから。」

私は笑った。これ以上・・・悪くない回答。
成らば・・・私は鬼と化しても良いつてことね。

「今の伊織ちゃんは、僕をおもちゃ扱いするし、
どSだし、センス悪いし、ど変態だし、恥じらいがないし、うっ・・・」

リノ君の話が、まだ続きそうなので、止めてみた。

鬼、喜怒哀楽の具現化？

『マンションの直列上の空間』【1722】

闇の中に、鬼の気配を感じる。
姿は見えないけど、
気のエネルギー量が、半端じゃない。

今にも噴火しそうな火山の火口を、
見下ろしているかのような圧迫感。
竜巻を目の前にした恐怖感。
揺れる地殻。
文明に対するカタストロフィー。

「鬼って言うのは、
そんな自然の脅威に似ているのかもしれない」

頭はいつもの様に思考したが、身体は怯えていた。
足の指先から手の指先まで、鬼の圧迫感に震えていた。

イヤホンから声が聞こえた。
「すぐ助けが来るから、待っててね・・・」
伊織さんの声だ。
少しだけ震えが収まった気がした。

伊織、若干引く。

『直列上の異空間』【篤師】

喪失感・・・

闇の空間に入る瞬間、心の一部が取り除かれた様な感触がする。

その一部は、とても大切なものだったのかも知れない、と失った後思う。

でも失った後では、それが、なんだったかは覚えていない。

異空間に入る時、脳が何らかの誤動作を起こしてそう感じるだけだ。

武史はそう解釈したが・・・俺は何か失っているような気がする。

異空間に突入した俺と康徳は、今、

しっとりとした声の工兵に向かって闇の中を走っている。

この方向で計算上は、間違いはないはず。

「計算上は・・・」

曖昧で脆い言葉の様に感じる。

過去に鬼と遭遇したことがある。

最初は、恐ろしさのあまり立ち尽くしてしまったこともあるが、

鬼からはこちらを視認できない事は解っている以上、

慣れてしまえば大したことはない。

ゴーグルに、青い光が点滅し始めた。

「しっとり工兵ちゃん」がいる計算上の方角を表示している。

空間に鬼の気配が充満し始めた。

康徳が刀を抜いた。もちろん妖刀だ。

通常の刃では鬼は斬れない。

どこからか入り込んだ閃光が、妖刀の刃に反射して妖しく光った。

血を求める餓えた刀が放つ光だ。

兜のヘッドフォンから、伊織のあどけない声が聞こえてきた。

「……みんな、聞こえる？」

「聞こえる」

俺と康徳と武史と博司が同時に答えたらしい。

4人の声が重なる。意思と息がピッタリだ。

「……」

伊織は、それに若干、引いたらしい。

0, 01秒にも満たない時間だが間が出来た。

しかし、すぐに

「工兵を救出後、鬼を賞金首のいる空間に押し出して！」

「はっ？」

また4人の声が重なった。しかし、今度は間を作らず

「工兵を救出後、鬼を賞金首のいる空間に押し出して！」

と繰り返した。

すぐ武史が叫んだ。

「鬼を、人のいる空間に入れるのか！？」

「鬼」は「鬼」

『直列する空間』【武史】

兜のヘッドフォンに、伊織のあどけない声が聞こえた。

「予告し・・・、撤退は出来ない。
・・・数の・・・勝てな・・・撤退・・・ず、
賞金・・・仕留め・・・
・・・これしかないじゃな・・・」

しかし、返信したが、繋がらない。
さすがに異なる空間同士。
無線が繋がる事自体、奇跡に近い。

俺たち兄弟は、闇の空間で合流した。

川のせせらぎが聞こえる。

この空間と直列した俺たちの住む空間が、
マンションの13階。
そのすぐ上の空間で川が流れている。
不思議な状況だ・・・が、
異空間にいること自体不思議な事だから、
どうってことはない、ってことはない、ってことはない・・・

そんな事が思考回路を巡っている間に
うずくまってる「しっとり工兵ちゃん」の姿を確認した。

俺は静かに近づいて
「助けに来た・・・」
と告げた。しっとり工兵ちゃんは、
真っ青な表情で俺を見上げた。
よっぽど怖かったんだろう。

「もう大丈夫だよ」と、
抱きしめたしっとり工兵ちゃんの身体は震えていた。

「どうする？」俺は篤師に視線を送った。

篤師は、「博司と康僊は、しっとり工兵ちゃんを、
伊織のいる所まで送れ。

俺と武史は無線が繋がらない以上、
作戦通り、鬼を賞金首のいるマンションに押し出す」
と視線と手振りで指示した。

博司の「俺も行く」と言う目を、
篤師は「しっとり工兵ちゃん」を一目見て、
「この娘の安全が、最優先だ！」と言う視線を博司に送った。
有無を言わせぬ視線だ。

しっとり工兵ちゃんと博司&康僊の帰還を確認すると、
俺と篤師は鬼の気配がする方向へと向かった。
鬼の気配がする方へ近づくたびに、
川のせせらぎの音は大きくなっていき、
俺たちは遂に、闇の空間内にある滝にたどり着いた。

滝周辺は、満月に照らされた程の明るさだった。
闇の空間にしては明るい場所だ。

「鬼だ・・・」
篤師が小声で呟いた。

鬼が・・・滝で行水をしている！？

俺は見とれた。

なぜかって・・・
鬼が、凄く美しかったから、
・・・この美しさ、人間で言うと伊織クラスの美しさだ。
そして、鬼は行水中・・・もちろん全裸だ。
身体のラインが柔らかで・・・女の鬼だ。
顔は能面の鬼を、より生き生きとした感じだ。
鬼独特の狂気と異質感はあるが、それも含めてやっぱり美しい。

篤師は「作戦結構」の合図の視線を送ってきた。

「あの美しい鬼を賞金首のいる空間に押し出すのか？」

と俺は篤師を見た。

美しい鬼に惹かれていた俺と違い、

篤師はあくまで「鬼」は「鬼」としてしか見ていないようだった。

鬼はあくまで人とは違う生き物。

その通りだけど、この美しさは・・・・

透き通る様な白い肌に吸い込まれそうだ。

作戦内容は、次元突破可能な時間までまち、

鬼を次元突破口に突き落とすと言う単純なもの。

鬼からこちらの姿は見えないが、

それでも捕まれば一瞬で撲殺される。

俺が惹かれてるからって、手加減をしてくれるとは思えない。

工兵の回収成功

『射撃ポイント01』【伊織】

博司と康徳の近接戦闘班が、
工兵を回収してきたのは、
想定していた時間よりだいぶ遅れていた。
迷ったらしい。

計算上正しくても、
まだ闇の空間には不確定要素があり過ぎて、
必ずしも計算通りには行かない。
私たちは、どこがどこに繋がっているのか、
全体像すら把握していない。

「伊織さ〜ん、怖かったです」
しっとりとした声の工兵ちゃんは、
そう言うと黒い覆面マスクを取って私の胸で泣き崩れた。

マスクを取るとはガードが薄い・・・。

規約では、工兵は覆面マスクを、
取ってはいけない事になっている。
それは戦闘班が捕まった時に、
情報が漏れ工兵まで捕まるのを避けるためだ。

知らない方がいい事は、知らせないし、あえて知ろうとしない。
この組織の鉄則だ。但し、
知るべき事は、知らせるし、無理にでも知ろうとすべきだ。

とりあえずリノ君と博司・康徳には、
見ないように視線を送った。

しっとり声の工兵ちゃんは、
そのしっとりした声がよく似合う、
大人しい感じで、清い顔立ちをしていた。
リノ君ともども、私のおもちゃにしたいタイプだ。

しかし、何で工兵なんかに志願したのだろう？

ビルの下では、サイレンの音が鳴り響いていた。
この道路を埋め尽くすパトカーの数、
街を完全封鎖する気らしい。
集められるだけ集めたに違いない。

警察が、大量動員する情報は、
何度も運営から情報が入って来ていたが、
そのたびガセネタだった。
そうなる情報が入ってもつい油断してしまう。
してやられた……

「かくなる上は、討ち死に覚悟でマンションに立て籠もる？」
冗談で言ったのに、博司が反応した。

「立て籠もり、デモンストレーションとしてはいいかも」

デモンストレーション……目立つとまた運営から苦情が来る。
苦情を受けるのは、チーム織姫&彦星のボスたる篤師だが（笑）

しかし、未だに篤師と武史からの連絡がない。

迷ったか？

俺の嫁か、二刀流か

『異空間の滝の前』【武史】

迷っていた・・・心が・・・

昔話では、鬼や龍や狐と出来ちゃった結婚する物語はよくある。

しかし！

まさか、現代に生きる俺が・・・

俺は、妄想の中で、滝に打たれる美しい鬼を抱いていた。
そして、愛をはぐくみ、契りを結んだ。やがて子どもが生まれ、
子どもは健やかに育ち、そして、
俺は鬼の嫁や子どもたちに見守られながら、一生を終えた。

・・・あっ、もう、死んでもうた！俺の人生短っ！

待てよ・・・鬼の嫁なら、やはり鬼嫁になるのか？本物の鬼嫁じゃん！

迷う俺に、篤師が声をかけた。

「おい、武史、早く行くぜ」

妄想解除しても、
美しい鬼を抱いた妖しいほど艶（なまめ）かしい感触は、
消えることはなかった。

妖しいほど艶かしい・・・
そう、目の前の滝で行水している美しい俺の嫁・・・
あっ、まだ俺の嫁ちゃうわ。

艶かしの字源は、ちょっとモバイル検索

色が豊か、要するに・・・豊かな色気・・・

うっわあああーなんてことだ！

美しい鬼から溢れんばかりの色気が、
俺に襲い掛かる！！！！！！

とりあえず落ち着け俺・・・この状況で妄想を暴走させるな。

豊かに色と書いて「なまめかしい」と読む。

このテストには出そうにはない単語を、
中3男子が始めて使ってしまう程、
妖しく艶かしい・・・女の鬼

しかし！

二刀流を極めるんじゃなかったのか俺は？

いいのか俺？

こんなんだから、篤師に勝てないんだ。

すべてにおいて・・・

とりあえず俺は、先行する篤師の後を追った。

風の知らせ

『滝の水辺』【美しき鬼】

何かいる？

不安になって、岩に掛けていた絹の衣を纏った。

滝の周りを見渡しても、怪しい者は何も見えない。

気のせい？

闇の中を流れる澄んだ風が、素肌にそよいだ。

風の冷たさが、心地いい……。

その風が知らせてくれた。

誰かが、心を時めかせている。

私だって、誰かが背中をそっと押してくれれば、

もっと、時めきに彩られた恋路を歩いていたはず。

……と、他力本願な考えが浮かんだ瞬間、誰かが私の背中を押した。

そっとじゃなく、強く……突き飛ばしたと言ってもいい位。

楽園に飛び込んだ【1722】

『射撃ポイント01』【博司】

伊織は、しっとり工兵ちゃん【1722】を抱きしめながら、髪を撫で回していた。
【1722】を、愛でる事に夢中の伊織は、めるかとの要塞規約上、
「工兵である【1722】の顔を隠さなければならない。」と言うと使命を、
完全に忘却していた。

【1722】は伊織の比べれば、
普通の女子に見えてしまうが、その普通さがまた可愛い。
伊織の様に、まぶしすぎる美人を見続けていると、なおさら可愛く見える。

「デモンストレーション、何か政治的な主張でもするの？演出担当」

伊織の問いに、演出担当の僕は答えた。

「主張と言えば主張だけど・・・要は僕たちの行為が、
バイト感覚でやってる賞金稼ぎじゃなく、
この行為自体が、この世の理（ことわり）ではなく、
地獄の審判の類だと思わせたいんだ」

伊織は、僕が説明している間も、【1722】をじっと見つめ、
そして、【1722】の唇に自分の口を押し付けた。

目の前の行為に、僕が驚いたのは言うまでもないが、
もっと驚いたのが【1722】だ。

もしかすると初めてのキスかも？

驚いて唇を離れた【1722】は、伊織をじっと見上げた。
伊織は、ここぞとばかりに優しげなに【1722】を見返した。
その時の伊織の綺麗な顔立ちと表情と言ったら、この世のものとも思えなかった。
【1722】は、伊織に見とれた。見とれてしまったと言ってもいい。
そして、楽園に飛び込むように伊織の胸に抱きついてしまった。
【1722】が、リノ同様、伊織のおもちゃに落ちた瞬間だ。

【1722】の飛び込んだ場所が本物の楽園なのかどうかは不明だが、僕も飛び込みたいのは事実だ。

「……で、具体案は？」

伊織は、新しいおもちゃを手に入れつつ、僕との話も続けた。

僕の思考回路は具体案を構想し始めた。

その間、新しいおもちゃを手に入れた伊織は、満足した顔で、おもちゃ1号のリノの背中に腰掛けた。そして、【1722】にも、座るよう薦めた。

や・・柔らかい・・・

『射撃ポイント01』【リノ】

射撃体勢で、賞金首のマンションに狙いをつけたままの僕の背中に、伊織ちゃんが腰掛けた。

や・・柔らかい・・・

そして、伊織ちゃんに続き、専属工兵のしっとりちゃんまで、僕の背中に・・・

や・・柔らかい・・・

僕の背中に、2人のお尻の感触が・・・

うん、とりあえず説明しよう・・・

伊織ちゃんの方は、弾力があっていい感じに硬めで、
しっとりちゃんの方は、とにかく優しく柔らかい・・・

し・・幸せ・・・背中の方から、いい香りもしてきたし・・・

そんな幸せなひと時は、長くは続かなかった。
賞金首のいるマンションで動きがあったからだ。

「伊織ちゃん！マンションで動きが！」
僕は、仕方なく叫んだ。

イキナリ？

『賞金首のマンション』【美しき鬼】

私の背中を押したのは誰？

イキナリ突き落とされた私に、
そんな事を考える暇はなかった。

目の前には、武装した人間が数人。

そこは、殺しのプロが出ず、独特の気で満ちていた。

人間は私の姿を見るなり、発砲してきた。

イキナリ突き落とし、イキナリ発砲かい？
これだから人間は！

私は気で時空を歪め、弾丸を弾き飛ばした……

人間の驚いた顔と言ったら……
でも、良く見ると美味しそうな人間たちじゃないか！

ふふ……骨の碎ける音って、いつ聞いても良い音なこと。

好きな言葉は、確定要素です。

『射撃ポイント03』【佐織】

高い熱源体が突如現れ、他の低めの熱源体と格闘した。
その後、高い熱源体は他の熱源体を引きずり、
画面からふっと消えた。

これが、サーモグラフィーが映し出した、
賞金首がいたマンションでの出来事だ。

高い熱源体は、
篤師と武史が押し出した鬼と思って、間違いないだろう。

私の側では、私の護衛の忠志がマシンガンを強く握り締めている。

「忠志・・・力入れすぎ、もっと力抜いていいのよ」
「は、はい」

「佐織！聞こえる？今から、みんなで突入するよ！デモンストレーションの始まりよ」
無線から伊織のあどけない声が聞こえた。

「デモンストレーション？何それ？」
「うん、突入しながら博司に考えさせる」
「だから、何それ！」
「篤師と武史との連絡が取れないの、それで数が足りないから、佐織と忠志も参加して」
「篤師と武史って、うちの主力じゃない。主力抜きで突入する気？」
「うん、大丈夫よ、いざとなれば逃げればいいんだし」

「逃げるって・・・いくら闇の空間を通れるからって、闇の空間の存在は極秘事項よ。
敵に知られたら私たちの存在自体が危うくなる。敵前で、簡単に使うものじゃないわ。」

「うん、わかってるよ。でも、警察が部屋に入ってくる前に、
立て籠もりの準備をしなくちゃいけないから、時間が無いの・・・
あっもうすぐ空間が開く、行かなくちゃ・・・」

と、無線が切れた。

「どうします？」
忠志が聞いてきた。

困った・・・ホント困った。

賞金稼ぎの様なことしてて、何だけど・・・
何の考えもなしに、先に進む様な事は、私には出来てない。

臆病とか恐怖心とか、そう言うんじゃない。
ただ、何の考えもなしに、先には進めないだけだ。
不確定要素の多さに、思考と行動が止まり、
一種のパニックを起こしてしまう。

でも、困った・・・そんな自分に困った。
動きを止めた私に忠志が言った。

「突入しないんですか？」

忠志の、その無邪気さと無遠慮さに、苛っと来たのは事実だ。
私は、その苛立ちを隠して、瞬発的にニコッと微笑んだ。

「私たちは、突入はしない・・・みんなで突入して、イザって時誰が援護射撃するの？
全体を見渡して冷静に考えるのも重要よ」
もっともらしい言い訳だ。

でも一理ある・・・はず。

俺、恋、焦がれてるのに・・・

『闇の空間・森の中』【武史】

可愛いから、美人だからって、許される限度って、
どこにあるのだろう？

森の奥から、あの美しき鬼が、何かを引きずりながら歩いて来た。
俺と篤師は、美しき鬼から、姿が見えないと解ってはいるが、つい、木陰に隠れてしまった。

引きずられているのは、間違いない・・・賞金首とそのボディーガードだ。
縄で繋がれているが、まだ生きてる。

そして、陽気な美しき鬼の口から、それだけは聞きたくなかった言葉が聞こえてきた。

「食材♪食材♪獲れたてえーの食材♪」

可愛いから、美人だからって、許される限度って、
どこにあるのだろう？

これも鬼の形？

『賞金首がいたマンション』【伊織】

リノと康徳は、すぐにバリケードの構築に取り掛かった。
出来る男、好き。ヘタレも好き・・・見境なしかわしは！

気合をいれて突入はしてみたものの、
私たちが狙撃した窓が割れているのと、家具が被弾しているだけで、
博司が期待していたおぞましいものは、何も無かった。

「やはり鬼の仕業にしては物足りない。せめて生首を晒すとか・・・」
博司は嘆いた。

実際、そんなもんだ。鬼だって暇じゃない。

博司は早速、作業に取り掛かった。

リビングには他の部屋とは、逆さにした白屏風で区切られ、
まるで今まで武士の切腹が行われていたかの様な血しぶきと、血のついた短刀、盃が二つ、湯漬
け用の茶碗、香の物3きれ、塩、味噌の肴が載せられていた皿、そして、逆さ箸が置かれていた
。

急遽、工兵が揃えた物だ。ちなみに血は輸血用の血だ。
何でも揃えてくれる工兵だ。

「変に血の海を作るより、意味深なイマジネーションが、世間により深い恐怖感を与える。」
博司・談

果たしてこの演出が、どんな結果をもたらすのか？

「そして、仕上げは、鬼を意味する、寅柄のパンツ」

と・・・寅柄のパンツ??

「これだけ手の込んだ演出をして、最後に寅柄のパンツって何よ！」
私のツッコミに博司は「ん？」と疑問符を打った。

「ブラもある」

博司は、寅柄のブラを、私の胸に突きつけた。

「着ないよ」とすぐに断りを入れた。

こいつの鬼のイメージがよくわからん。

次に、博司はしっとり工兵ちゃんを見つめた。

しっとり工兵ちゃんは、「えっ？私・・・」と言いながら、

ジロジロ見つめる博司から、小さめの胸のふくらみを隠した。

嫌がるそぶりを見せながらも、

しっとり工兵ちゃんは明らかに可愛い顔を作っていた。

吟味を終えた博司は首を振った。

「イメージと違う」

「ひ・・・ひどい」

しっとり工兵ちゃんは声にならない声で私に、切なく儂く訴えた。

その切なく儂い顔・・・可愛いよ。

もちろん私は思いっきり抱きしめたよ。

「この娘になら、母乳上げてもいいな。」とか思った。出ないけど。

左のおっぱいをしっとり工兵ちゃん、右のおっぱいをリノ君・・・

幸せかも・・・

いかん！何の妄想じゃ、私は変態か！変態にもほどがあるわ！

博司は、仕方なさそうに、ブラとパンツを持ってトイレに向かった。

まさか・・・私としっとり工兵ちゃんは顔を見合わせた。

トイレから出てきた博司は、寅柄のブラとパンツを着ていた。

「デモンストレーションを完成させる為なら仕方ない」

デモンストレーションの意味が解らなくなって来た。

痩せ過ぎで骸骨のようで、そして、少女の様な少年が、寅柄のブラとパンツを着けた姿は、

今まで見たことがない絵だった。

「なんだろう・・・この生き物？」

しっとり工兵ちゃんが呟いた。

鬼に連なる家系図が見つかったって言ってたけど、やっぱり……
これも、鬼の形か？

外では、やたらうるさいへりの音がした。

「……軍の攻撃へり？」

新種の生き物・博司が言った。

投稿者不明の動画 2

『マンションの一室』【投稿者不明の動画】

時代劇で見た事があるような風景。

白い屏風に囲まれた場所に、血のついた短刀。

短刀の刃の一部は和紙で包まれており、切腹用の刀を思わせる。

当たり一面には、血が飛び散っていた。

カメラが、部屋全体を映すが切腹した死体らしきものは確認出来ない。

画面は代わり、カメラはマンションの外を映していた。

そこには軍の攻撃ヘリが滞空しており、パイロットの顔が僅かに見えた。

その次の瞬間、攻撃ヘリのガトリング砲が火を噴いた。

銃撃によって、マンションの部屋は粉々に砕けていく。

そして、時間にすると1秒程、少女らしき人物の後姿が映った。

少女にも同様に銃弾が浴びせられ、少女は凶弾に倒れた様に見えた。

1章 完了

2章の目次

- 1 2章の目次
- 2 投稿者不明の動画 3
- 3 境界を越えた者への罰？
- 4 地上はきらきら輝いて見えた。
- 5 本当の弱肉強食の続き
- 6 振り返れば忍がいる。
- 7 忍ちゃん裸にエプロン事件

投稿者不明の動画 3

『街中』【投稿者不明】

動画タイトルが、「男たちの休日」

20代前後の男たちが、
買い物したり、ボーリングをしたり、
カラオケを歌う映像が、
3分程度にまとめられたいた。

久しぶりの休日なのだろう、
やたら、はしゃいでいた印象だけが残るが、
それ以上のものは見受けられなかった。

再生回数は少なかったが、
コメントが1つだけあった。
「この人たち知ってるよ」と。

境界を越えた者への罰？

『闇の空間・森の中』【武史】

森の中の静けさと言ったら、ほとんど無音だった。
時々風が吹き、木々の葉がそよぐ音がするのみだ。

そんな清らかな自然が、科学技術に包まれた俺たちに罰を与えたのかも知れない。

俺たちの鎧の動きを補完していた油圧が、俺のも篤師のも故障してしまった。
今までは何も着ていない時より動きが軽かったのが、
今は油圧系も含めての30キロの鎧が、俺の動きを鈍らせた。

「篤師・・・鎧、脱いでいいか？」

バテた俺は聞いた。

「お前・・・武士の魂とも言える鎧を脱ぐって言うのか？」

「武士道馬鹿のお前から、武士道を取ったら何が残る？」

それを言われると、言葉もないが・・・

「それに鎧を脱ぐと鬼に姿を見られてしまう。

ここは鬼の住む世界だ。何がいるか分からない」

それを言われると、言葉もないが・・・

「地味顔のお前から、鎧をとったらキャラとしてどうなの？」

それを言われると、言葉も無いが・・・

しかし、俺の限界は30分後にやってきた。

30キロの鎧が身体に押し掛かり、俺の足は動きを止め、

俺の意思とは関係なく地面にひざが着いてしまった。

ボクシングで言えば、ダウン扱いだ。

ひざを着いた俺に、篤師はため息をついた。そして、俺の肩を抱えてくれた。

俺は篤師に身体を預けながら「また、篤師に負けた・・・」心の中で俺は呟いた。

篤師は言った。

「この跡を付ければ大丈夫だろう。とりあえず水の飲める場所を探すか」

鬼は、賞金首とボディーガードを引きずりながら歩いていた為、地面には引きずった跡が残っていた。

川の音は聞こえないが、水の匂いを察知した。
生きる欲求が感覚を研ぎ澄ましたのかもしれない。

木々を掻き分け、俺たちは水の匂いがする方へ歩いた。

川のせせらぎが聞こえた時、篤師と一緒に、肩をなでおろした。

本当に小さな小川だったが、俺には大いなる恵みだった。
俺は兜と鎧を脱ぎ、倒れるように小川の水を飲んだ。
身体が水で満たされていく～幸せ。

でも、兜と鎧を脱いでしまった俺って、「絵的に地味なんだろうな」とか思いつつ、
ふと後ろを振り返ると、俺を守るように、篤師は周囲を警戒していた。

俺はいつ、こいつに勝てるんだ？

「武史・・・計器と無線が故障してしまったらしい。」
篤師が言った。

疲れと乾きで気に留めなかったけど、
たしか俺の計器と無線も電源が入らなかった様な・・・気が・・・する。

振り返れば忍がいる。

『女子寮・佐織&忍の部屋』【佐織】

照れ屋なのかも知れない。

私のルームメイトの忍ちゃん。

彼女、私の事をずっと見てる。

それも物陰に隠れて・・・。

教室で、食堂で、街角で、大浴場で・・・

怖いとかじゃなく、私としては、

ぜんぜん見られても、問題はないんだけど。

忍を見つけると強制的に、私の側に引き寄せる。

すごく肌の白い娘で、欧州系の白さじゃなく、和系の白さ。

日本昔話に出てきそうな肌の白さ。

すべすべしてて、触ると気持ちいい。

「ずっと私のストーカーしてたから、罰としてセクハラね」

ストーカー女とセクハラ女が住む部屋。

う～ん、問題ありなそな関係。

でも、忍に見られていると、

私に対する脅威のすべてを、取り除いてくれそうで、

安心する。もしかすると本物の忍者なのかもしれない。

私は、私にとって世界で一番安全な場所かも知れない、

忍の胸に顔を埋め、安心して目を閉じ思考に耽った。

軍のヘリが現場に投入された時、

私は伊織の命令を無視して、

射撃ポイント02に留まっていた。

チームの一員として命令無視は最悪だ。

しかし、結果、現場にいた【1722】以外の仲間を救ったのは事実だ。
命令無視の件に関しては、今後の課題として残す。

攻撃ヘリは、2機。1機は伊織たちへの攻撃。

もう1機は上空を旋回していた。

戦術目標は1つしかない。

伊織たち本隊に撤退の時間を与えること。

3秒・・・3秒あれば、伊織たちなら撤退できるはずだ。

私は射程の短いマシンガンしか持っていない忠志を先に、奥へ撤退させた。

「僕も戦う！」と言い掛けた忠志を、無視。構ってる時間がない。

心の中で「解るよね。解るよね。この現状、忠志なら解るよね」と願った。

私は、伊織たちへ攻撃を掛けている攻撃ヘリを狙撃した。

狙撃回数は限られている。

私の上空を旋回している攻撃ヘリが、攻撃モードに入る前に、私も撤退しなければ、多分、即死だ。

狙撃で、攻撃ヘリを撃ち落せるとは思えない。

ただパイロットがこちらを気に掛けてくれれば、それで十分時間稼ぎができる。

私は「こっちを向いて、ここにも美少女がいるよ、ヘリのイケメン君」と願った。

そう言いながら、照準はコックピットだったけど、私、ひどい女。

玉鋼弾が、運よく装甲の弱い所に当たったらしい。

狙撃を受けた攻撃ヘリは、こちらに旋回しようとした。

私はニヤけた。

パイロット君は初陣か？

賞金稼ぎ相手なんて、汚れ仕事だし・・・精鋭とは言いがたいのかもしれない。

上空を旋回中のヘリも私に気づいたはずだ。

それを確かめる事もなく、私は専属工兵の綺麗な手が手招きをする方へ走った。

工兵の手があまりにも、この世の物とも思えないほど綺麗だったので、「私、もう死んでるかも知れない」とか思った。

撤退して知ったことだが、忠志は私の命令を無視して、マシンガンを撃ちまくっていたらしい。

即、忠志はその場にいた康僊にぶん殴られた。

「佐織さんを守りたかったから、佐織さんに生きてて欲しかったから・・・」
忠志は泣きながら言った。意外と泣き虫だった。末っ子だし・・・

「男が泣くな！」

と、康僊にもう一回殴られた。

・・・私だって、忠志には生きてて欲しい。

そして誰だって、指揮下の部下に死なれたくはない。

要塞本部から寮に帰るとき伊織が、つぶやく様に私に言った。

「私・・・しっとり工兵ちゃんを死なせちゃった・・・」

私に縫（すが）りつく伊織に、私は何も声を掛けられなかった。

まだ篤師と武史とは、連絡も取れない。

熱帯夜の涼しい出来事

『女子寮・伊織の部屋』【伊織】

篤師と武史とはまだ連絡が取れない。
運営が、計算上、篤師と武史がいるであろう場所を、
探してみたいが、姿は確認出来なかったらしい。

明日は、しっとり工兵ちゃんの葬式。
私は、関連性を疑われるから、出席出来ない。
運営が言うには、これも情報戦の一環らしい。

しかし、熱帯夜のせいで、暑くて眠れない。
さらにクーラーも壊れている。
だれかの部屋に行って涼む事も出来るが、今は誰にも会いたくない。

窓を開け、ベランダに出ると涼しい風が、素肌に当たった。
「冷たくて気持ちいい……」そう独り言を言った時、背後に気配を感じた。

ある程度、予想してたけど……

振り返ると、しっとり工兵ちゃんが、部屋の中で立っていた。
こう言う事初めてじゃない。
死者は別れを告げにやってくる。

「ごめんなさい……」
私が言うべき言葉を、先に言われてしまった。
「私の方こそ、ごめんなさい、だよ。」

「私、全然、誰の役にも立てなかった……私なりに頑張ったんだけど」

私は、しっとり工兵ちゃんに近づいた。
涙を流しながら、しっとり工兵ちゃんは、私の胸に顔を埋めたけど、
私は抱きしめてあげることは出来なかった。
実体のない魂を、抱きしめてあげることは出来ない。

「いつも私、こうなんだ。足手まといで、役立たずのダメ人間。
1度くらい、みんなに頼られてみたかった。伊織さんみたいに・・・」

私みたいに・・・この子を死なせてしまった私みたいに？

「私、頼られたい、誰かの役に立ちたいの、
だから、私に篤師さんと武史さんを、助けてあげてって頼んで欲しいの、
今の私なら、うん、私にしか助けられない」

「しっとりちゃんにしか、助けられない？」

「うん、闇の空間では、こちらの空間の機器は長時間持たないの。
あの二人は、その時間の限界を超えてしまっている。
伊織さんは救援に向かおうとしてるけど、長時間に及ぶ搜索活動は危険です。」

長時間の使用が持たない？考えたこと無かった。
油圧はともかく、機器類の充電はまだ充分だと思ってた。

しっとり工兵ちゃんが、何かの言葉を待つように、私を見つめている。

魂とは言え・・・可愛い。
逆に、この世のしがらみが抜けた分、さらに可愛く見える。
本質的に良い子なのだろう。
さすが、私のおっぱいをあげてもいいと思わせた子。

しかし、この視線は、「篤師と武史を助けてあげて、お願い、助けられるのは、
しっとりちゃんだけなの・・・」って、言葉を求めている訳ね。

私は、私の部屋に別れを告げに来た死者の魂を・・・焦らしてみた。（笑）
焦らされるしっとり工兵ちゃんの魂・・・可愛い。

しっとり工兵ちゃんが焦らしの限界に近づいた時、私は言った。
「篤師と武史を助けてあげて、お願い、助けられるのは、しっとりちゃんだけなの」

すると、しっとり工兵ちゃんは、嬉しそうに微笑んだ。
「私に任せてください。必ず、お2人を助けだして見せます。」

しっとり工兵ちゃんはそう言うと、スーと消えて行った。

しっとり工兵ちゃんがいる間は涼しかった部屋も、一気に暑くなった。

ホントに、死んじゃったんだ。私は実感した。

本当の弱肉強食の続き

『鬼女の砦』【???

上空では羽根を羽ばたかせた天狗が、「何事か？」と巡回していたが、興味がないらしく、どこかに飛び去って行った。

鬼女に引きずられていた賞金首とボディーガードたちは、途中停まっていた牛車の荷台に乗せられた。

彼らは、それなりに強面のおっさんの集団なのだが、売られていく子牛の様な悲しい目をしていた。

ドナドナ状態の一行は、岩山の頂上に通じる獣道を上り始めた。

「お前、本当に牛かよ！」と思えるほど、牛車の牛は急勾配を駆け上っていく。

駆け終わった先は、牛の我が家だ。

引き籠り気味のこの牛、自分の部屋が駆け上がりたくなるほど大好きらしい。

牛車は激しく揺れ、牛に跨った鬼女は楽しげに、荷台の男たちは悲しげに悲鳴をあげた。

岩山はそれ自体が砦になっていて、周囲は柵で囲まれていた。

砦の門には、仁王像似の二人の男が立っていた。

仁王像との違いは、頭に角が生えていること。

そして、寅柄のパンツ。上半身は裸だった。

その鍛えられた身体は、まるで彫刻のようだった。

「ウーサン、これお土産」

鬼女は、フライドチキンのボックスを「ウーサン」と呼ばれる方に渡した。

「ウーサン」と呼ばれる方にのみ・・・

こちらがウーサンなら、阿吽（あうん）で、

もう一方はきっと「アーサン」なのだろう。

無視されたアーサンは、すでに涙目だ。鬼の目にも涙。

お土産を、自分だけもらえなかった程度で、鬼が泣くのか？

それとも深い何かがあるのかは不明。

そして、鬼女がいつフライドチキンを買ったのかも不明だった。

あのチキンは、賞金首が買ったものでも、ボディーガードが買ったのもでもない。

不明な点が多々あったが、屋根に矢倉がついた大きな門は開かれ、
牛車の牛はやっと辿り着いた我が家に

「モ—————！」と歓喜の声をあげ、牛車を引きなが厳かに門内に入った。
なぜか厳かに・・・他者の目が気になるタイプらしい。

砦内では、鬼女の帰りに、美しい少年少女が忙しなく働いていた。

その少年少女の、作られた感のある美しさから、きっと式神の類なのだろう。

「ようこそ私の砦に」

鬼女の歓迎の意を込めた言葉に、食材たちは「イヨイヨか」と怯えた。

「私だって鬼じゃないんだから、取って食べたりはしないわよ」

と自分たちを食べようとしている鬼女に言われて、なんとツッコめば良いのだろう？

もちろん食材たちは無言だ。

せっかくボケたのに、なんの反応がないので鬼女はがっかりした。

空気を読んだのか、ふんわりとした感じの少女の式神がツッコミ？を入れてくれた。

「なんでやねん！」

「……………」

鬼女も賞金首もボディーガードたちも言葉がなかった。

これが紙で作られた式神の限界らしい。

鬼女は、食材たちの体つきを確認すると、筋肉質なボディーガードと、そうでない賞金首とに分けた。

「私ダイエット中だから・・・脂肪分はちょっと遠慮しとくわ」

もしかすると助かる・・・そう賞金首は思ったかも知れない。

そして、賞金首が連れられた場所は、砦の裏山。

山腹の横穴に掘られた檻に賞金首は入れられた。

賞金首は檻の奥の方に鎖で繋がれたが、檻の扉は開けっ放しだった。

「なんだ、これは？」と賞金首は考えた。

どこかで見たことがある・・・この形状の檻。

「罨だ・・・これは動物を捕まえる為の罨だ。そして、俺がその餌？」
その結論に、賞金首は慌てた。

その慌てようをボケだと思われたのか、
また、ふんわりとした感じの少女の式神が、ツッコミ？を入れた。
「なんでやねん！」

「・・・なんでだろう。」
そう呟くと、賞金首は今までの人生を悔やんだ。

ふんわりとした感じの少女の式神は牢番らしく、檻の外で賞金首をずっと見張っていた。

「猫かよ！」

そのツッコミ口調の言葉に、疲れ切って寝込んでいた賞金首は目覚めた。
見ると猫ではなく、巨大な人食い虎が、檻の中に入ってきていた。

すると、再び、ふんわりとした感じの少女の式神が言った。

「ネコ科よ！」
虎はネコ科の動物らしい・・・。

「今・・・そんな説明は要らない」
それが、賞金首最後の言葉だった。

地上は、きらきら輝いて見えた。

『女子寮・大浴場更衣室』【生徒会長】

深夜4時を回った更衣室は、静まり返っていた。
扇風機前の椅子には、バスローブを着た伊織が一人で座っていた。
だいぶ前に乾いたであろう髪が、扇風機の風に靡いていた。

それが、絵になる美しさだと言う事は認める。

伊織の好きなキャラメル・マキアートをテーブルに置くと、伊織は目を上げ私を確認した。
伊織は泣き疲れた目をしていた。

「今からお風呂？」

「うん」

「生徒会長って忙しいのね」

「うん」

【チーム織姫&彦星】にとって、【1722】の死は、初めて直面する仲間の死だった。
私は慰めることも出来ず、1人で大浴場に入った。

あの現場に、軍のヘリが投入されるという情報は、生徒会にも入っていなかった。
あの部隊は、対テロ専属部隊で極秘裏に組織された部隊だった。
空挺部隊や、所謂エリート部隊は予め外されていた為、察知できなかったのだ。
大した念の入れようだ。
防衛省のどこかの部署と一部の将校クラスのみが知っていた情報だ。
精鋭を外し、ザコのみで構成された部隊。
市街戦を行い国民を敵に回しかねない作戦内容ゆえに、
使い捨てが簡単なザコが選ばれたと言う事か・・・

私は誰もいない温泉で、少しだけ泳ぐと、そのままお湯の中に潜った。
生徒会の仕事が忙しくて、ここ何ヶ月も泳いでない。
生徒会に入る前までは、地上を歩くより泳いだ距離の方が断然多かったのに。
泳ぎたい・・・何もかも忘れて。

お湯の中から見ると地上は、きらきら輝いていて、
「どんなに美しい世界があるんだろう」と思わせる。
でも実際は・・・破滅に向かっている。

「うっ・・・」

誰かの足が、私の顔に押し付けられた。

私の頭はそのまま、浴槽の底に・・・

私は慌てて体をバタつかせた。

「殺される？」

と思った瞬間、私は解放された。

慌てて立ち上がると、足を濡らした伊織が、じっと私を見つめていた。

そして、

「私のせいで、しっとり工兵ちゃんを死なせてしまった・・・」

伊織の目から、再び涙があふれ始めた。

「現場を指揮していた私は自分が許せない！」

伊織の声が大浴場に響いた。まだ、あどけない声だ。

そして、長めの沈黙の後・・・

「だから、だから私は、あなたを沈めて見た。

お陰で気が済んだわ。おやすみなさい、生徒会長さん」

伊織は、そう言うと大浴場を出て行った。

「・・・はあ?!」

深夜にも関わらず、私は大浴場で声を上げてしまった。

ど・・・どういう事?

なんか、ものすごく理不尽じゃない?

自分が許せないのに、なぜ私を沈める!!!!!!!!!!!!

「エースはこれだから、扱いづらいのよ！」

忍ちゃん裸にエプロン事件

『めるかとり要塞・27 戦闘指揮室』【康僊】

ほぼチーム織姫&彦星専用の27 戦闘指揮室は、メンバーの私物であふれていた。
戦闘指揮室と言っても、まだ要塞自体が建設途中の代物の為、設備の面で使い勝手がまだ悪い。

「ピザ頼もうぜ、ピザ」

伊織は、陽気に言った。

無理にテンションを上げてる感じが、少しだけした。

「僕、カツ丼がいい」

末っ子の我俣くそ餓鬼・忠志が言った。

「我俣な・・・お前は、協調性を持て」

と僕はどついた。すると佐織が

「康僊、叩かないでよ！良いじゃない食べたい物を食べれば」

と忠志を庇い、忠志の頭をなでなでした。

いつの間に・・・忠志の奴、佐織を味方に引き入れた？

結局、それぞれ好きなものをオーダーする事にした。

この27 戦闘指揮室に集まったメンバーは、伊織と佐織。

そして僕と博司、忠志。リノは体調を崩して欠席だ。

議題は、闇の空間から、未だ戻らない篤師と武史の事だ。

オーダーは、議題に入る前に来た。

「やっぱり、炒飯がいい、ピザと交換しよう？」

伊織は僕の炒飯を見て言った。

伊織の綺麗な目で見つめられながら、言われると即答でしょう。

「うん」

「なんで伊織ちゃんの我俣は聞いちゃうんですか？僕はどつかれたのに」

クソ餓鬼の忠志と、可愛い伊織、同じ扱いな分けがないだろう？

忠志に佐織が同調した。

「酷いよね～康僊君って」

「当然の扱いよ」

そう言った伊織が炒飯を食べようとするすると佐織がすかさず

「伊織ちゃん、いただきますは？」

「いただきます。」

拗ねて言う伊織も可愛いぜい。

「あっ、やっぱ私、オムライスにしてほしい・・・忍ちゃんお願い」

伊織がまた我侘を言った。

しかし、忍ちゃんって誰だよ？

僕が簡易キッチンを見ようとする、佐織が

「見ちゃダメ！忍ちゃんは今、裸にエプロンだから！」

なぜそんな子がここに？

「忍ちゃんは裸にエプロンじゃないと、料理ができない性癖なの」

「ぜひ会いたい！」

・・・気配を感じ、ふと、伊織の炒飯を見ると、

いつの間にか薄焼きの卵が掛けられオムライスになっていた。

そして、僕のピザが一切れなくなっていた、驚愕。

さらに、僕の頭にエプロンがかぶさってきた、驚愕。

僕の頭にかぶさったエプロン・・・すごく幸せな香りがする。

状況から考えると・・・すごく好ましい状況だよね。

僕は、伊織と佐織の視線を意識して、

エプロンを頭からとった・・・とらざる得なかった！

でも、このエプロン・・・本物？

伊織と佐織に、からかわれている可能性も否定できない。

2人の表情からは、何も読み取れない。それが逆に怪しい・・・

【忍ちゃん裸にエプロン事件】が起きていたにも関わらず、

ミートソースに大量の粉チーズを、

満遍なく掛ける事に熱中していた博司が言った。
粉チーズの蓋は開いたままだ、多分、まだ掛ける気だ。

「篤師と武史の件・・・
しっとり工兵ちゃんが死で落ち込むのは判るけど・・・
いくら勝手に動く兄貴たちだって、
連絡が着かなくなって、もうすぐ78時間だぜ、やっぱ異常だよ。
運営の捜索とは別に・・・チームとして何か対策とかあるの？」

オムライスにケチャップで絵を描いていた伊織が顔を上げた。

「ない」
伊織以外のメンバーの声が揃って
「えっ？」
と。
「何もしなくても、あいつらなら、勝手に帰ってくるよ。」

冷静な佐織も、さすがに口を挟んだ。
「篤師と武史が入っていったのは、
闇空間なのよ、私たちの空間とは異なる空間なのよ、
状況、解かってる？」

「あいつらと、私の言葉を信じて・・・以上よ」
そう言ったきり、伊織がこの件に関して、話すことはなかった。

ケチャップで描かれた絵は、似てないけど、多分篤師と武史だと思う。
心配ではあるらしい・・・
博司は再び粉チーズを掛け始めていた。
そして、僕の手元には、忍ちゃんのエプロンが・・・

『葬儀後の式場』【環境保護団体顧問弁護士】

賞金首の葬儀の後、私は遺族の元に賞金首の遺言書を提示した。

遺言書には、「株券及び預貯金の全額を〇〇環境保護団体に寄付する」と記載されていた。提示された環境保護団体の役員名簿には、彼の名前が記されていた。

「家族にも知らせず、影ながら活動を支援していたのでしょうか」私の言葉に、額が億に及ぶだけに、遺族は複雑怪奇な表情をする。

そんな中、高校の制服を着て参列していた長女が言った。「私は・・・私はお父さんの意思を尊重するべきだと思う」

その少女の、父の尊厳を守ろうとする健気な表情には、一見、泣ける。

しかし・・・

「お父さんの意思を尊重するべきだと思う」この言葉に私は笑いを堪えた。ここで笑っているようでは顧問弁護士として失格だ。お嬢さん、この遺書に、お父さんの意思なんか一文字だって入っていないんだよ。お父さんはね、ホント私利私欲の人だったからね。

でも、この偽造された虚構の遺言書の内容が、彼女の娘としての誇りを維持させるには、役に立ったかも知れない。

長女の言葉に、親戚の中心人物らしいき男が止めに入った。「考えさせてください・・・」私は、哀悼の意を示す表情を保ったまま返答した。「解りました、後日伺います」

もう無理なのだ。すでに親戚がどうあがこうが、素人には1円たりとも引き出せない。死人に口なし・・・賞金首の生前から行われていた陰謀に、今さら誰も異議を唱えられない。

この環境保護団体に流れた金は、いくつかの団体を経由して、

懸賞金として賞金稼ぎ達の懐へと入ることを、あくまで噂としてだが、私は知っている。

【ちゃんとしようねモード】 起動？

『学園都市』 【佐織】

明治初期に、オランダ人のメルカトル女史によって開かれた女子大学。
後に、初等部・中等部・高等部が併設される。

表向きは、プロテスタント系の学園となっているが、
数か月暮らすうちに、それだけじゃない雰囲気を感じさせる。

テーマパークの様な、ロマネスク建築の下には、
まるで地下水脈の様に、本質が隠されている様な気がする。

私は今、大学前に来ている。
中等部の学生には多少、居心地が悪い雰囲気だ。
中学生って子どもなんだと思わせる大人の雰囲気。

しかし、ここの女子大生の格好・・・
男の目を気にしなくていいから、なのだろうけど、ヒドイ！

大抵、ノーメイクにスウェットのラフな格好。
たまに見かけるおしゃれな先輩は、
きっと外部にバイトにでも出かけるのだろう。

生徒から教職員・牧師に至るまですべて女となると、こうもなる。
中等部も他人のと言えないど・・・。

私は、大学の研究練の事務所に行った。
この辺りは学園都市の中核と言っていい建物が立ち並んでいる。
大学の研究練にしては物々しい警備だ。

「あの、望月先輩に会いたいんですけど」
私は事務所の警備員に告げた。

柔道部出身らしき体格と顔立ちだの警備員は
「アポは？」
「取れないから、直接来ました。」

「理事長代理は忙しい。学生と遊んでる暇はない。」

【理事長代理】望月先輩のもう一つの名称だ。

あくまで代理だが、次期理事長。

そして、めるかとする要塞の運営メンバーの一人だ。

唯一、名前が判明しているメンバーだ。

私は、篤師と武史の件で、1人で乗り込もうとしてる。

伊織は、しっとり工兵ちゃんの件で、

鬱ってるから、今日はお留守番。

「あの・・・私、【チーム織姫】なんですけど、
会わないって言うなら実力行使してもいいんですけど」
と、脅してみた。

丸腰で、ヘナヘナな私に、柔道部出身ぽい警備員と渡り合える訳もない。

しかし、予測通り【チーム織姫】の名は効いたらしい。

いや、すごく効いた・・・らしい。

【チーム織姫】の名は一応、公にはしてないけど、
そこまで秘密じゃない。

特に、この学園中枢部の人間達は間違いなく知ってる。

事務所の奥から偉そうな人が来て、
研究練のかなり奥に通された。

いくつかのセキュリティーを通過する間に、
持ち物を取られた。もちろん携帯も取られた・・・

伊織と連絡が取れなくなる不安感がよぎった。

こんな時になって気づくけど、あの子の事、
結構頼りにしてるのよね、私。

さらに、服も脱がされ、白衣の様な服を着せられた。

何かの検査？もしかして手術されるの？

予想外のセキュリティーの嚴重さに、
多分、私、キョドってるはず。

いくつものセキュリティーを通過して、
やっとたどり着いた応接間は、
いたって地味な、殺風景といってもいいくらいの場所だ。

しかし、ソファの座り心地の良さが、
それなりの場所である事を示していた。

秘書ばい人に

「少々お待ちください」
と言われ、紅茶とケーキを出された。

もしかすると毒でも入っているかも？
今の時代、人の命より利権だし・・・

そんな考えがよぎったが、この時点で、
エースの【チーム織姫】の私を消す意味はないし、
この人達の利害と一致しない・・・はず。

そんな思考後、私が食べようとする、誰かが声をかけた。

「慎重・・・なのね」
たぶん、望月先輩だ。

今、起きたらしく、
髪はボサボサで、ダサめのパジャマ。
パジャマの上着のボタンが2個もずれてる。
2個もずれるって！どういう神経してんのよ！
お陰で、綺麗なおへそと胸の膨らみが見えたけど。
少しだけ見える、ブラとパンツも、もちろんダサめ。
「どこに売ってねん、そのブラとパンツ！」
ってツッコミを入れてたくなるくらい。

しかし・・・もっとも気になるのは、やはりボタンの掛け違い。

ボタンをかけなおしたい。

ボタンをかけなおしたい。

ボタンをかけなおしたい。

私の中で抑えられない衝動が。

どうしよう、相手は先輩だし理事長代理だし……。

伊織なら、すぐにでもかけなおせるのに。

理事長代理は、寝ぼけたまま、

私の前のテーブルに腰掛けた。

私は慌てて、紅茶とケーキを避難させた。

そして、2個もずれてるボタンが、私の目の前に！

「これは仕方ないよ」私の中で何かが呟いた。

ついに私の中の、【ちゃんとしようねモード】が起動してしまった。

気がつくと、望月先輩のパジャマのボタンを外してた。

どんな気分なんだろう。

初対面の後輩の女子中学生に、

突然、パジャマのボタンを外されるって。

望月先輩は、リノ君並にキョドってた。

もしかすると望月先輩の脳裏に

【チーム織姫&彦星】の、

殺戮シーンが浮かんだのかも知れない。

凶暴な殺戮マシンに怯える女子大生？って感じかも。

賞金稼ぎのイメージってそんなものか

「私は……男の方が好きです。」

寝起きの望月先輩の必死の抵抗の言葉だ。

……後輩に敬語……

……先輩は寝起き……

……私は【チーム織姫】の殺戮マシン……

……今、この部屋の空気は私が支配している……

- ・ ・ ・ ・ 秘書及び警備員の気配は感じられない ・ ・ ・ ・
- ・ ・ ・ ・ ここは、望月先輩のプライベートな空間だから？ ・ ・ ・ ・

そんな考えが浮かび、
良からぬ企みを計画している自分の思考回路に気付いた。
時として、私の思考回路は、私自身に対しても犠牲を強要する。

鬼のように強く抱きしめられたい！

『闇の空間・森の水辺』【武史】

「闇の空間」と俺たちは呼んでいたが、決してどこまでもが闇ではないらしい。

今、俺たちがいる場所は・・・正確な場所は分からないが、俺たちが生まれ育った空間で言うと、明け方前ほどの明るさはある。場所によって明るさが違うらしい。もしかすると、慣れれば住みやすいかも・・・

「ここは闇の空間・・・考えようによってはあの世と考えられなくもない。だとすると賞金首は死んだも同然だろ、これ以上身を危険にさらす価値はない。ここは撤退しよう」

篤師が言った。もっともな判断だ。

しかし、俺の意見はと言うと、あの美しい鬼に会いたい。人と鬼・・・付き合うには余りにも、障壁が高すぎる。そんな事は解っている。

・・・しかし、

・・・ん？さてよ・・・

家で発見された鬼に連なる家系図が本物であれば・・・佐織は「昔話の類」と言っていたが、俺とあの美しい俺の嫁・・・あつまだ嫁ではないが、俺と、あの美しい鬼との、種の違いによる障壁自体が意味をなさなくなる。

あの美しき鬼に、鬼のように強く抱きしめられたい、俺の理性が、壊れるほど。鬼のように強い愛を感じたい、俺の欲望が、たじろぐぐらい。

ふふふっ、俺、にやけそう。

まあ、そんな俺の気持ちを、篤師に言えるわけもなく、俺は建前を並べた。

「その程度の気持ちだったのか？
賞金稼ぎとは言え、俺たちには正義があった。
その正義に対する責任は、その程度だったのか？」

篤師の表情が怖気づいた。

うっひょ—————！俺の心は踊った。

正義、そして責任感・・・この男の良いところでもあり、弱点でもある。
さらに、俺は続けた・・・

「伊織や佐織だって、今回の作戦の結果を待ち望んでいるはずだせ。
そりゃー確認出来なかったと答えるのもいいさ。
しかし、作戦の成功♪を報告した方が、断然良いに決まってる。
あいつ等の喜ぶ顔が目に浮かばないか？」

そう、この男の最大の弱点が、ここだ。
篤師にとって、妹の様な伊織と佐織。
この男の面倒見の良さ・・・そして、伊織と佐織の綺麗な容姿。
男5人兄弟の長男として生きてきた、男臭いこの男。
この二人の女の色香の為なら、命だって投げ出しかねない。

あっ、篤師が一瞬だけ、伊織と佐織を思い出してる顔をした。
そんな顔、見たくなかったぜ兄貴！

「武史が、そこまで正義や責任感について考えていたとは、
俺としても嬉しい・・・、解った、ここはお前の気持ちを優先しよう」

篤師はこう言ったが・・・
理由は、それだけかい？篤師さんよー（笑）

節操を少々、恋心を少々、血を少々。

『理事長代理の応接間』【佐織】

勢いは維持されなければならない。

・・・のに、私は、望月先輩のパジャマのボタンを外した直後、ふと、望月先輩の顔を見上げてしまった。

普通の女子同士目線で、望月先輩と見つめあってしまった。

結果、私は、自ら勢いを止めてしまった。

この瞬間、【チーム織姫】の威光は消え
凶暴な殺戮マシーンと、
それに怯える女子大生の関係性は解消され、
私は主導権は失った。

そして、私の仕組んだ虚構は消え
女子中学生と女子大生、少女と大人の女。
その女としての差に私は歴然とした。

主導権をとりも出した望月先輩は
「脱がしたいの？それとも、ボタンをかけなおしたいの？」
女としての差に基づき、私に迫った。
そして、望月先輩の手が、私の頬を撫でた。

私、遊ばれてる。
女子大生が、女子中学生で遊んでいいいの？

私は焦った。
このまま脱がしちゃうと、そう言う行為に行っちゃう。
うん、私の思考回路のシナリオでは、そうなるけど・・・
でも、目前に迫ると焦る。
もう私に主導権はないし、勢いもない。

望月先輩の手が私の肩に触れた。
鳥肌が立った。

やっぱ初めての相手は、篤師がいい・・・
・・・って、なんでここで篤師の名が出てくる！
今のは撤回。

私の感情が焦る中、私の思考回路は提示した。

望月先輩に、身体を委ねて手に入るもの。

【めるかとり要塞運営へのアクセス権】

【篤師・武史の搜索拡大の可能性】

【チーム織姫&彦星の地位のアップ、
結果、消耗品として消費される可能性の低下】

そうだ、思い出した、ここに来た目的は、
篤師と武史の搜索拡大を頼むことだった。

私が、犠牲になれば、篤師と武史に、また会えるかも・・・
望月先輩・・・嫌いなタイプじゃないし、性格も良さそう
触られるくらいなら。

うん、キスくらいなら・・・望月先輩の唇、可愛いし・・・

私は覚悟を決め、望月先輩の問いに答えた。

「脱がしたいです！」

私の発言に、ビビったのは望月先輩だった。

あの問いは、少女の私へのハツタリだったらしい。

「私は、その・・・女子とそう言う事をしたいと思ったことはなくて・・・。」

「いまさら！」

賞金稼ぎで身に付けた私の俊敏さから、
箱入りの望月先輩が、逃れるすべなどなかった。

それはまるでクーデターの様な行為だった。

この作戦で私が手に入れたもの

【めるかとり要塞運営へのアクセス権】

【篤師・武史の搜索拡大の可能性】

【チーム織姫&彦星の地位のアップ】

【望月先輩との特別な関係】

【快楽と墮落と秘密】

この作戦で私が失ったもの

【節操を少々】

【恋心を少々】

私が、望月先輩に仕掛けた事なのに、
望月先輩は優しく受け止めてくれた
その優しさに私は泣いた。何、この涙？

そして、私は今どこにいるのだろう？

さっき、血を採取された・・・

私が失ったもの追加

【血を少々】

抱き枕は命綱

『別荘タイプのアジト』【リノ】

今、僕がいる場所は、別荘タイプのアジトで、
闇空間への出口の出現ポイントがある家だ。

要塞の運営は、
この出現ポイントを、いくつも保有している。

この家には人は住んでない。
別荘タイプだし、
さほど重要なポイントじゃないだろう。

2階の家具のない部屋に莫塵を敷いて
僕と伊織はお昼寝タイムだ。

窓を開けると涼しい風が入ってくる、
この時期にクーラーなしでもいける最良の物件だ。

音質にこだわる伊織が、
備え付けた高音質のスピーカーからは、
聞くだけで落ち込んでしまう歌詞の曲が流れている。

「みんな、地獄に墜ちちゃえばいいのに～」
と思える曲ばかりです。精神衛生上良くないです。

伊織の心の回復の仕方が、
とことん落ちて底を見てから、
這い上がるパターン。

でも、底に落ちたまま戻ってこれないと困るから、
僕が命綱代わりに傍にいるわけ。

今、伊織は僕に抱きついている状態。
おもちゃからちょっと昇格して、

僕は今、抱き枕。

伊織自身はドSだけど、
伊織の身体は、とても優しい感触がする。
これで、伊織が落ちてないと最高なんだけど・・・

落ちてる時の伊織は、
泣いたり、喚いたり、叫んだり、暴れたり、
怖がったり、何かに怯えたり、
そう思うと、静かにいじけてみたり。

ホント、手に負えない。

でもね、少しずつ回復していく伊織を見ていると、
なんだか嬉しくなるのは事実だよ。

『高層マンションの密室』【相越】

「事件性は何もない。これは政府の見解だ。」

その言葉に、所轄の刑事は僅かに眉を潜めた。
軽蔑する物を見た時、まともな人間が見せる表情だ。

その視線を俺は軽くスルーした。
構ってられえるか！

鑑識により、スチール弾が発見された。
鉛弾による鉛汚染を避けるため、
地球に優しいエコテロリスト達が使用している弾丸だ。

その優しさとは対照的に、
被害者は、首の大動脈を撃ち抜かれ、
部屋は血に染まっていた。
エコロジーとは程遠い光景だ。
地球には優しくても、
被害者には優しくはなかった様だ。

「もう帰っていいぞ。後はこっちで処理する」
俺の声に、所轄の刑事達は、
こちらに聞こえない音量で、何かを愚痴った。
もちろん、スルーだ。一々構ってられない。

俺は、機動隊を一瞥し、刑事たちを追い払わせた。
機動隊も機動隊で複雑な顔をしていた。
機動隊も警察なのだが、
内閣の命令により今は俺の指揮下だ。
これも内務省の政治力が物を言う。

閉められた窓、一見すると密室殺人と思われるが、
これがエコテロリストの仕業であるなら、
ミステリー小説の様なトリック殺人とは言いがたい。

これはある種の技術だ。それも未知の・・・・。

だからこそ俺が呼ばれた。

佐織のフェロモンの効果

『理事長代理のプライベートルーム』【佐織】

私の手足は、ロープで縛られ身動きが取れない。

その状態の私に、望月先輩は聞いた。

「私の事、愛してる？」

「ロープを離して！」

「私の事、愛してる？私の事、愛してるって言いなさい！」

「私を縛っておきながら、何が愛よ！こんなの愛とは言わない！」

「いいわ・・・佐織が私を愛するまで、私は待つわ。

どうせあなたは、私から逃げられないんだから・・・」

望月先輩はそう言うと、私の脇をなめた。

私は、軽蔑と憎しみを込めて、望月先輩を睨み付けた。

私の表情を望月先輩のメイドの栗栖が、

研究用のカメラでじーと映している。

こうなってしまったには、私にも責任があった。

私の身体から出るフェロモン、

望月先輩好みの、ものすごく良いに香りがするらしい。

その香りが、望月先輩とメイドの栗栖の、

変態妄想性を目覚めさせてしまった。

私は彼女たちのスイッチを押してしまったらしい。

その覚醒の瞬間を私は目撃した。

それは、猫に股旅をあげた時に似ていた。

二人同時に、フラッとふらついて、

猫にでもなったかのように、私にじゃれて来て、

なんやかんやで私は縛られたって訳。

箱の中に閉じこもってばかりいると、

多少壊れるのか知れない。

知ってる？

身体で一番フェロモンが出る場所ってどこか？

脇とお尻らしいの・・・はあ（溜息）

なんで、私がこの状況で意外と余裕でいられるか分かる？

1・・・縛られる快感に気付いて、Mの覚醒を起こしたから。

2・・・忍ちゃんの気配をずっと感じていたから。

正解は、2番でした。

変態ストーカーの忍ちゃんにしてみれば、

この程度のセキュリティは、何でもない。

もしかすると忍ちゃんも、

私のフェロモンにやられたのかも知れない。

その日の夜、私は忍ちゃんに救出された。

メイドの栗栖が撮った変態動画を持って・・・。

これで理事長代理の首は押さえた。

次の日、私の部屋に望月先輩とメイドの栗栖が謝りに来た。

泣きながら嘆願するその目は、恋する乙女が目だった。

若干ウザイです。

普通の恋がしたいです。

また縛られたいです・・・えっ？

栗栖の微笑み

『理事長代理のプライベートルーム』【望月】

部屋には、メイドの栗栖が入れた、
ダーズリン紅茶の香りが漂っていた。

その品の良い香りが、
私の意識をきれいに調べてくれた。

しかし、
「私は、どうかしてた恥ずべき行為よ」
佐織の拘束事件、思いだすだけで、冷や汗が出る。
しかし、自分のもう一つの側面を知り得た事は、
貴重な体験だった。

栗栖は、穏やかな口調で言った。
「もう、気になさらなくても、佐織様のお許しも出たことですし」

メイドの栗栖は16歳。
本来なら高校に通っているべき年齢なのだが、
中学の時、人間不信に陥った彼女は、
寮の部屋で立て籠もり事件を起こした。

繊細で優しい彼女が起こした事件に、
周囲は驚愕した。

立て籠もり事件を起こした彼女への処遇を、
中等部が苦慮したため、私が引き取る事にした。

彼女には、もっと緩やかな時間を与えるべきなのだ。
そうすれば、穏やかな輝きを放つ良い女に成長する。

「朝早く起きて、クロワッサンに挑戦してみました。
ちゃんと出来てるか自信はないけど・・・」
今度は、焼き立てのクロワッサンの香りだ。
一口食べると、つい笑顔が零れるほどの美味しさだ。

私の笑顔に、栗栖は嬉しそうに微笑んだ。

この微笑みは、
誰かが守ってあげなければならない微笑みだ。

私に守れるだろうか？

テーブルの上には、
佐織の身体検査の報告書が置かれていた。

「やはり・・・千代のミトコンドリアか・・・」

張り巡らされた殺気

『高級住宅街周辺の狙撃ポイント』【りの】

僕の隣で伊織は、
バージョンアップした戦闘指揮ソフトの、
現場起動確認をしていた。
より広範囲の情報を瞬時に取得する為だ。
今回のバージョンアップで、
空からの強襲にも対応できるようになった。

「これで、もう空からの奇襲は不可能よ・・・」
伊織は呟いた。

僕は、しっとり工兵ちゃんが死んだ、
あの現場を、ふと思い出した。

篤師と武史がいない間も、
【チーム織姫&彦星】は、稼ぎを続けた。

運営は、一人の賞金首に対して、
抽選で選ばれた1チームのみに、
攻撃優先期間を設定してる。

この攻撃優先期間に、
他のチームが賞金首を仕留めても、
選ばれたチームのポイントとなる。

今、【チーム織姫&彦星】は、
【チームタルタルソース】の、
攻撃優先期間が過ぎるのを、
じっと待っている。

次の期間の優先権を、僕らが持っているからだ。

【チーム・タルタルソース】の射撃班から、

こちらが見えたのか

「時間が過ぎるまで邪魔すんじゃねえぞ！ガキども！」
と無線が入った。

会えば、普通の人たちなのだが、
攻撃優先期間中は、やはり荒れてる。

伊織は、ソフトの確認作業をしながら、
可愛い（おちよくってる？）声で応答した。
「タルタルさん、ファイト♪」

「あっ・・・はい（照）」

さっきの勢いは、タルタルさん？

タルタルさん程では無いけど、
こちらもかなり緊張している。
主力の篤師と武史抜きでの稼ぎだ。

そして、今回の敵はかなりの大物。
中ボスクラスだ。
ボディーガードの傭兵数も半端ない。

そこで、佐織が提示した作戦は、
チーム・タルタルソースが、
期間内に仕留めれば、そのまま撤退。
取り逃がした時は、その混乱に乗じて、
賞金首を仕留めると言う計画。

その前準備に佐織は
賞金首の所在を突き止められないでいた
チーム・タルタルソースに、
期間ギリギリになって、所在情報を教えた。

チーム・デミグラスソースの失敗で、
ソース一味は焦っている。
今回のチーム・タルタルソースも多少焦っていた。

緊張感漂う賞金首の豪邸周辺。

そんな中、一人だけゆるい子がいた。

伊織だ。

「最近、お尻、好きかも。」

狙撃体勢の僕のお尻を撫でていた。

・・・うん、でも・・・

・・・言動は、ゆるいけど・・・

伊織の殺気は、考えると怖いくらい、

周囲に張り巡らされていた。

私は冷静を装う。

『賞金首の豪邸周辺』【伊織】

パソコン画面上では、まだ動きはなかった。

リノ君は私の靴を脱がして、
愛しそうに私の足の指を見つめていた。

だから、
「親指から順になめて・・・。」
と言って見た。何かの本で読んだ台詞だ。

躊躇するリノ君・・・そこも可愛いんだけど。

ほとんど思いつきだったんだけど、
近接戦闘班の篤師と武史が抜けた分を、
補強するため私とリノ君も重装甲を纏うことにした。
佐織が反対すると思ったけど、
「私も重装甲を着る」と言ってくれた。感謝です。

別に、今回の賞金首に、
特別な思い出があるわけじゃないけど、
篤師と武史がいないからって、取り逃がしたくはなかった。
戦力的に弱っている時にこそ、
力を示せる、それが本当の力だと思うから。

傭兵の数は、15人前後。
それに対して、【チーム・タルタルソース】も15人。

運が悪いことに、
異空間への演算システムがダウン。

【チーム・タルタルソース】は、
異空間を利用できずに、

戦わなければならない。

共同作戦を促して見たが、
篤師と武史の主力が抜けた

【チーム織姫&彦星】は軽く見られ、
賞金の取り分を8：2で提示してきた。

「こっちの取り分2割って！」

話にならないので、交渉はすぐ決裂した。

こっちは好意で言ってあげたのに・・・

【チーム・タルタルソース】の、
攻撃優先期間が1時間きった頃、
正門付近で爆発音、手榴弾によるものだと思う。

最初から、手榴弾なんて・・・

最近、賞金稼ぎの攻撃が派手になりすぎてる。

危惧すべき事態かも・・・

「いやん！」

足元を見ると、リノ君が私の足の親指をくわえていた。

ど・・・どうしよう。胸がドキドキして興奮する。

私は冷静を装いながら言った。

「は・・・早く、具足を着けないと、戦闘始まってるとし・・・」

いくつかの裏切り

『豪邸内』【軍事警備会社・傭兵】

正面玄関で爆発音？

手榴弾か？

今までの、賞金稼ぎとは手法が違う。

庭に放してあったドーベルマンの悲鳴が聞こえた。

「依頼人と家族を奥へ！」

私の部下の声がした。

しかし、この場所を賞金稼ぎに、
嗅ぎ付けられたと言う事は・・・

この場所は、

「家族にひと目会いたい」

と言う依頼人の為に用意された、
住所もない特別な場所。

情報が漏れたのか、もしくは、
この場所自体が罠だったかのどちらかだ。

情報が漏れた場合は、我々のミスだか、
罠だった場合は、我々にはどうしようもなかった。

この場所は、依頼人の信頼の置ける人物が、
手配したと聞いている。

だとすると、

依頼人の言う【信頼の置ける人物】が、
我々を嵌めた事になる。

すでに、電話も無線も通じない。

この現状を・・・我々が嵌められたこの現状を、

本社に知らせるすべは？

学校のグラウンドほどある庭の向こうで、正門が炎上していた。

『賞金首の豪邸周辺』 【リノ】

伊織は、足の指までいい匂いがした。
世の中には、
存在のすべてが素敵な人がいるんだ・・・
そう思うと、僕は幸せな気分になった。

僕が、なんか幸せな気分になっていると伊織が言った。

「あれは・・・ロケット弾？
あいつらロケット弾を使う気？」

伊織の声に、僕は照準を、
【チーム・タルタルソース】の狙撃班に合わせた。
その直後、複数の射撃ポイントから、
ロケット弾が発射され、
標的の豪邸に向かって飛び立った。

次ぎから次へと飛んでくるロケット弾に、
賞金首がいる豪邸の壁は、
粉々になって飛び散っていった。

爆発音が響く中、豪邸は崩れ落ち、
あっという間に瓦礫の山と化した。

ホントにあっという間だった・・・

「あいつら・・・これじゃあ、
そこいらのテロリストと変わらないじゃない！」

伊織は、無線と取ると大声で言った。

「どう言うつもり？」

私たちは少なくともエコテロよ。」

応答はすぐに来た。タルタルのリーダーの声だ。

「・・・程度の差だろ、
小火器が重火器に変わっただけだ。」

「これじゃ戦争じゃない！私たちは賞金首と、
それを守る傭兵を仕留める程度じゃなかったの？」

「こうエスカレートさせたのは、政府の方だ。
いいか、本来、治安維持は警察の仕事だ。
しかし、政府は軍の攻撃ヘリを国内の治安維持に投入した。
お前らのところの工兵が死んだ事件だ。」

伊織は、手を握り締めた。

タルタルのリーダーは、伊織の手が、
どれだけ強く握り締められているかなんて、
知る由もなく話を続けた。

「軍が国民に銃を向ける、
これは治安維持じゃない、内戦だ」

「内戦・・・」
伊織と僕は呟いた。

嘘ではない、ただ、全てではない

『豪邸周辺』【佐織】

庭の真ん中で、
傷ついたドーベルマンの下に隠れていた、
傭兵の生き残りに狙いを定めた。

「逃げちゃダメ」
そう呟きながら、私は引き金を引いた。
この作戦の後始末みたいなものだ。

本来、賞金首以外は、標的ではないのだが、
今回は理事長代理からの指示だ。

この豪邸では、誰も死なず、
ただの豪邸の爆破解体作業が、
行われただけにしたいらしい。

この場所に、賞金首とその家族がいたことを知る人間は、
私たち賞金稼ぎ以外は、賞金首とその家族、
そして、ボディガードの傭兵のみだ。
今回に限り、軍事警備会社も知らないはず。

「今回の賞金首の何が特別なの？」

私の問いに理事長代理は、
私のフェロモンを嗅がしたのに、
何も言わなかった。意外と意思が強い。
もう少し押せば良かったのかも知れないが、
私の羞恥心が限界だった。

今回の理事長代理の指示と、
私と理事長代理の関係は、
伊織たちには秘密だ。

なんとなく心が痛む。

陰謀の中枢に近づく事は、
精神衛生上あまり良くない。

「誰かいたの？敵？」
私の隣にいる忠志が聞いてきた。

「ドーベルマンが撃たれて苦しんでいたから、
一思いに、死なせてあげたの」
私は答えた。

嘘ではない、ただ、全てではない。

メイド栗栖の青春？

『二段ベットの二階』【佐織】

寝具にはこだわりがある。

私の枕はオーダーメイドだし、
敷布団も宇宙船にも使われる素材で、
夏は涼しい作りになっている。

選びに選び抜かれた私の寝具たち。
そんな寝具たちが私の疲れた身体を癒してくれる。

ちなみに、私は頭まで布団を被って、
布団の中に潜って眠るのが好き。
これが一番、安心する。

今日も、潜って寝ていたら、（ため息）

賞金稼ぎの仕事だけでも疲れるのに、
さらに、陰謀めいた事もやらされ、
私は疲れていた。

だから、誰かが私のベットに潜り込んでも、
目覚めるのが鬱陶しかった。

どうせ、女子寮に【おもちゃのリノ】を持ち込めなくて、
寂しくなった伊織か、ルームメイトの忍に違いない。

彼女たちは、夏の暑さなんか気にならないらしい。
この熱帯夜に、人肌を求めてくるなんて・・・鬱陶しい。

この熱帯夜に、
また、誰かが潜り込んできた・・・鬱陶しい。

「やめて下さい・・・私は怪しい者ではございません」
あれ？伊織でも忍でもない声・・・

でも、聞いたことがある、この声。

この声は・・・栗栖？

夜中に人のベットに潜り込んで来て、
私のお尻に、顔をうずめながら、
「怪しい者ではない」と平然と言えるその声の主は、
理事長代理のメイドの栗栖に違いない。

「やめて下さーいーい！」
栗栖は小声で叫び声をあげた。
すると、ベットの中から栗栖の気配がフッと消えた。

この状況で小声とは、メイドらしい気遣いだ。

布団に潜ったまま、部屋の気配を伺うと、
メイドの栗栖が、天井から逆さまに吊るされていた。
多分、忍の仕業だ。
ここは普通の女子寮の部屋。
天井から人を吊るす罟などなかったはず。

部屋の中に、忍の姿は見えないが、
どこかにいるはずだ。

逆さまに吊るされたメイド姿の栗栖は、
めくれるスカートを必死で抑えていた。
普段、上品さが漂う栗栖だけに、なんか哀れだ。

でもね、栗栖先輩・・・

後輩のお尻に顔をうずめるほうが、
恥ずべき行為なんだよ。

栗栖は、布団の中から様子を伺う私と目が会うと、
「理事長代理からの伝言があります」
と小声で言った。

私は、寝ぼけた振りをして、
じっと栗栖を見つめた。

ダウンライトに照らされた、
栗栖の生足が艶かしい・・・

しかし、何だろうこの状況。

男子禁制の女子寮で、
天井から逆さに吊るされた品の良いメイド。
それを布団の中からネコ科の動物の様に、
じっと見つめる女子中学生。
そして、その様子を隠れて伺うく忍。

数秒の非日常的な静寂の後、

品の良い栗栖の声が、熱帯夜の私の部屋に響いた。

「こ・・・これが、青春ってものなのですね」

「そう・・・これが青春・・・」

私が呟くと、闇に潜む忍が、素早く訂正した。

「違います」

不幸な少女時代を送ってきた栗栖に、
間違った青春像をイメージさせたくはなかったらしい。
忍は、意外と体育会系。

アスパラガスとオクラを生ハムで巻いたもの

『佐織の部屋』 【佐織】

「お目覚めですか？お嬢様」
理事長代理のメイド・栗栖の声だ。

栗栖は、
折り目が綺麗に着けられたメイド服に、
身を包んでいた。

そして、部屋は「新居か！」と思えるほど、
掃除・・・違う、これは掃除の域を超えている。
部屋は、ピッカピカに磨かれていた。

そして、昨日、
お風呂に入らずに寝てしまったにも関わらず、
身体が汗臭くない。

どう言う事でしょう？

うわ！足の指の爪まで、磨かれてる！
うん、まあ、いいや。綺麗になったんだから。

・・・朝から、問い詰めるのはよそう。
こう言う事は、変態忍で慣れている。
今更、変態が一人増えたところで・・・
二人とも、私の戦力になれそうだし。

「ちょうど、朝食の準備が出来ました」
と言われ、出された食事は、

ご飯と味噌汁、卵焼き、お漬物、
アスパラガスとオクラを生ハムで巻いた物、
サラダのコールスロー、紅しゃけ、明太子、

里芋とこんにゃくの煮物、豆腐、
そして、桃にイチゴにカシューナッツ。

朝ご飯らしい・・・。

「あーん、して差し上げましょうか？」

まさかの、申し出！
中学生にもなって、「あーん」だなんて。
これじゃ、伊織とリノの赤ちゃんプレイじゃない！

でも、したかったかも・・・
「あーん」してもらった記憶なんてない。
うん、この際・・・だから、
でも、とりあえず
「この事は、誰にも言わない？」
と尋ねた。

私のキャラ的に、
【チーム織姫&彦星】のメンバーには、
知られたくない。

栗栖は丁寧に答えた。
「お嬢様の秘密をばらす様では、
メイド失格でございます。
命に代えても秘密は守り通します」

そこまでの覚悟はいらないけど・・・

根は信頼出来る先輩だし。うん。
「それじゃあ、お願い。」
私は安心して言った。

最初に、私の口に運ばれたのは、
アスパラガスとオクラを生ハムで巻いたもの
だった。

朝から、なんと言う美味しさ！

生ハムが、生ハムが・・・

美味しさの秘密を、栗栖は説明した。

「この生ハムは、
アスパラガスとオクラを巻くためだけに、
作られたものです。だからこそ絶妙でしょう。」

「異議なし・・・うん」

【専用機は3倍】理論らしい。

そして、「あーん」されながら、栗栖と話したことは、
その行為とは程遠い「報復と暗殺」の話だった。

俺、ビビってなんかないんだからねっ！

『闇の空間・森の水辺』【武史】

月の優しい明かりも、星の華やかな輝きも、
光1つない、完全な闇。

この闇を支配しているのは、
虫や鳥や獣の鳴き声。風のせせらぎ。そう音だ。
闇に生きる奴らにとって光は、さほど重要じゃないらしい。

人間ほど光に頼っている生き物も珍しい。

常日頃から勇猛果敢なこの俺も、
この暗闇には多少、怖気づいた。

「おい武史」
突然、俺を呼ぶ声！

「俺、ビビってなんかないんだからねっ！」
なぜ俺が、ツンデレ対応をしたかは、俺自身にも不明だ。
そして、完全な闇のため、篤師の反応が解らない。

常日頃の俺の勇猛果敢から、
ホンの冗談だと受け止めてくるとありがたいが・・・

「あそこを見ろ、灯りがみえるぞ」
「あそこってどこだよ！」

篤師の声の反応から、
俺は、灯りが来るであろう方向を推測した。

灯りなんて、どこにも見えやしない・・・

篤師の奴、暗すぎて、灯りの幻覚でも見たのか？

しかし、数分後、薄っすらと灯かり見え始めた。

どういう視力してんねん！

俺の記憶が正しければ、小道があった方向だ。

ちなみに、俺の記憶の正解率は、20パーセントぐらいだ。

あてにしない方が利口だ。

しかし、今回は多分、その20パーセントの方らしい。

灯かりは小道にそって、道のはるか遠くの方まで伸びていた。

「何かの行列か？」

俺はその行列に、不吉な死の匂いを感じとった。

トン、トントン

『闇の空間・森の水辺』【武史】

行列の灯りの正体は、人々が持つ提灯だった。

提灯を持った行列は、

「トン、トントン」と小さな太鼓の音と共に、
俺たちの方へ、ゆっくりと進んで来た。

この時、逃げれば良かったのだが、
俺たちは、その幻想的な光景に見とれていた。

光り1つない闇の中で、ぼんやりと輝く無数の提灯の輝き。

もしかすると闇に対する恐怖から、
その提灯の灯りが、希望に見えたのかも知れない。

俺の心が、ある種の恐怖を感じた時には、
すでに、行列は俺たちの目の前を行進していた。

「恐！」と声を出しそうになる俺の口を、篤師は手で塞ぎ、
「声を出すな！」と俺の耳元で制止した。

「これは神霊の類だ、下手に関わると取り憑かれるぞ」

神霊の類・・・そりゃ、鬼がいる世界だ。
訳のわからん連中がいても、おかしくはない。

「いや・・・俺たちはもう、取り憑かれているのかも知れない」

「トン、トントン」と鳴っていた太鼓の音は消え、
篤師の言葉を証明するかのよう、
行列は、俺たちの前で止まった。

そして、提灯を持った人々が、俺たちをじっと見つめていた。

『スケートリンク』【伊織】

学園内にあるスケートリンクでは、
初等部の子から、大学院の先輩まで、
幅広い年代の少女たちが、
スケートリンクで華やかに舞っていた。

夏のスケートリンクは、涼しくて気持ちいい。

私は、「会わせたい人がいるから」
と、生徒会長に呼ばれて、
スケートリンクに来ている。
【チーム織姫&彦星】絡みだ。

リンクに着くなり、生徒会長命令で、
フィギアスケートの衣装を着るように言われた。

「生徒会長に、命令する権限などなかったはず」
と私は抗議したが、
生徒会長1名、副会長2名、書記2名の、
ものすごく生真面目さん達に囲まれ、
説得・・・違う、これは説教よ！

私は生真面目さんたちに、説教された。
数の上で、分が悪い。

彼女たちの言う事は、聞いてるうちに
「そう言われれば・・・理屈ではそうよね、
うん、着たほうがいいよね」と思えてきてしまった。
これは詐欺の一種に違いない。

そして、衣装を着て気づいたんだけど、この衣装は・・・
今、リンクで歓声を受けながら滑っている、
1流選手の皆さんが着るレベルの衣装だ。

実際、オリンピックの選考会で、
選手が着ていたような・・・気がする。

制服のままの生徒会長は、
じっと私を見つめ満足した。

「私、ぜんぜん滑れないけど・・・」
「いいの、いいの、伊織は可愛いからそれでいいの」

「可愛いからって、上手く滑れりゃ
あの子達も苦労はしないわ・・・
でも、どう言う繋がりですフィギアスケート？
もしかして、この子達は、実は、
フィギアスケート格闘技みたいなので、
私たちに技を伝授してくれるとか？」

「まあ・・・会ってみれば解るわ」

観客席からは、熱心なファンの子達が、
リンクに声援を送っていた。

その横を、エキシビジョン用の派手な衣装を着た私が通る。
それも憧れの選手が着ていたであろう衣装を着て！

解るんだよ。真剣なファンには、
私が滑れないのに、派手な衣装を着ていることが！
それも憧れの選手の衣装を

彼女たちの、私を見る厳しい視線・・・。

自分で言うのも何だけど、
私ってちょっと目立つくらい可愛いでしょう。
中等部の生徒なら、私のこと知ってるレベル。
それが、今回は逆効果！

「ちょっと可愛いからって・・・何、あの子」

「空気読めなの」

「性格悪そう・・・」

こんな軽蔑されたの久しぶり。

そんなこと気にしない生徒会役員たちは、
2階観客席の階段をさらに上に登っていった。

なんかムカッと着たので、
後輩の書記2名が、
ジュースを買いに行った隙について
生徒会長1人、副会長2名を襲撃。

彼女たちは、
声を上げる時間もなく、ノックアウト。
これが実戦経験豊かな賞金稼ぎの力よ！

そしてノックアウトされた3名の服を脱がし、
物置に閉じ込めた。
武士の情けで、鍵はしなかったけど。

書記の後輩の子たちには
「帰っていいよって言ってたよ」
と言って先に帰らせた。

そして、私も寮に帰宅した。

その日の丑三つ時、
私は生徒会長の生霊と対面することに・・・

その話は、また次回に。

『27 戦闘指揮室』 【佐織】

17歳くらいの少女が、長めの髪を結っていた。
水泳選手なのかも知れない。
背中と肩のラインがそれっぽい。

「これって、明らかに盗撮動画じゃねーか！」

私の言葉に、
悪ぶれる様子の欠片もない栗栖は言った。

「感嘆の声、ありがとうございます」
「感嘆ちゃうわ！」
「我々の情報網を使えば、
この程度の動画を入手する事ぐらい、
お茶の子さいさいです。・・・でっ、まだ見ます？」
「私に盗撮動画見せて、どうしようって言うの？」
私、そう言う趣味は、ないんだけど！」

「ふふふ・・・実はこの少女、
【宇都宮管領軍】を名乗る武装勢力の首領（ボス）です」

【宇都宮管領軍】毘沙門天の旗を掲げた、
上杉謙信気取りの謎の武装勢力だ。

めるかとの要塞との接触は、まだないらしい。
私の知る限りだが。

そして、公にはされていないが栃木県警は、
その軍門に降ったと言う噂だ。

警視庁が公安職員を内偵に出したらしいが、
その神出鬼没さ故に、未だ実態は不明。

「どうします、まだ見ます？」

宇都宮管領軍の首領の少女・・・見たい気もする。

名前ぐらいしか知らないけど、
宇都宮管領軍のイメージからは、
ボスのごっつい怖そうなおっさんの、
イメージだったのに。

こんなに凛々しい少女、見たことない・・・

私が、チラッと栗栖を見ると、
栗栖は、なにも言わずに動画を再生した。

あんなところまで・・・映してるなんて、
要塞の調査能力と変態性には、驚かされる。

そして、動画は変わり、今度は
20代後半くらいの男の映像に変わった。
こちらは無駄のない鍛え抜かれた身体だ。
「こちらが、第12戦車大隊の副隊長さんです」
それっぽい顔をしている。

男の身体が映った瞬間、
栗栖が、微かに怯えた様に見えた。

栗栖は、何事もなかったかの様に、
動画から目を逸らし、
持参したクラッカーにイチゴジャムをつけ、
「はい」
と私の口に入れた。

私はその怯えに、気づかない振りをした。

「そしてこちらが、しっとり工兵さんを殺した、
攻撃ヘリのパイロット」

運営が撮った動画に映っていた顔だ。

何度も見た。

彼はただ命令を実行しただけに過ぎないとはいえ、

あまり思い出したくない顔だ。

「あれ、この3人・・・」

「気づきました？」

「兄妹？」

「はい」

この絡み合う複雑な状況に、私は笑った。

『陸軍航空基地』【あきら】

上官の部屋から帰った俺は、2つの動画を見ていた。

1つめは、マンションで銃撃を受け少女が倒れる動画。

2つめは、俺たちが街で遊んでいる動画。

1つめの動画には、ヘリを操縦する俺が、ちらっと映っている。

そして、俺が撃ったガトリング砲によって、少女は死んだらしい。

あの現場では、少女の事は気づかなかった。

しかし、死体は持ち去られていたが、
致死量の血の痕が現場検証で発見された。
今日、上官から知らされた事実だ。

誰かを守るために、
航空隊に入ったのに、俺の手で少女を殺してしまうなんて。

俺は知らなかったんだ。あんな少女があの現場にいるなんて。
俺はただテロリストの掃討を命じられただけなのに。

上官は、「あれはテロリストだ」と言ったが・・・だとしても！
あんな少女を撃つなんて！

2つめの動画は、俺たちが街で遊んでいる動画だ。
あの時、誰かが俺たちを見ていた。
そして、コメントには「この人たち知ってる」と。

今、俺は誰かに監視されている。
基地周辺では不審車両が、度々目撃されていし、
何度か尾行された気がする。

テロリストは、俺に報復するつもりだろうか？

軍は俺を守ってくれるのだろうか？

末端の俺を殺して何になる？

俺は命令を実行しただけだ！

コン、コンコン

『闇の空間・森の水辺』【武史】

俺たちの前に、大名行列の様な籠が停まった。

そして、2人の少女が出てきた。

「お待ちしておりました」

2人の少女は声を合わせていった。

左の方は知らないが、右の方の少女は・・・

「しっとりちゃん？」

俺は尋ねた。

右の方の少女は、小さく会釈をした。

世話好き篤師が、

「どうしてこんなところに！」

と世話好きそうな顔して言った。

左側の少女は、しっとりちゃんの代わりに答えた。

「この娘は、あなたたちを助けるために、この場所に来たコン」

「来たコン・・・って、この娘・・・狐？」

「狐だからって、『コン』って、ベタ過ぎるよ、兄貴」

「お2人とも、言葉尻をベタだなんて、失礼です。

この方たちは狐だけどいい方ばかりです」

やはり狐だったらしい。

それにしてもしっとりちゃんの声いいわ～

「私は、こちらのしっとりちゃんに憑いてた狐の灯火コン」

しっとりちゃんに憑いてたって・・・平然と言ったけど、

狐憑きって、狂気的一种だぞ。

「私が憑いていたにも関わらず、この娘はダメダメで・・・コンコン」

悪い狐ではなさそう？

「とうとう死なせてしまったコン」

「何！」

篤師が声を上げ、狐の灯火に敵意むき出しの視線を向けた。

狐の行列は、その敵意にすぐに反応し、
辺りは殺伐とした雰囲気包まれた。

「皆さん、やめて下さい！」
しっとりちゃんのしっとりした声が、闇の空間に木霊した。

そのしっとりとした声は、人と狐の敵愾心を、
冷たい清流のように洗い流していった。

「しっとりちゃん・・・凄いかも」
俺は初めてしっとりちゃんを褒めた。

「私・・・褒められちゃったみたい」
しっとりちゃんは照れ笑った。
そして
「私、嬉しいよ・・・」
と言う言葉を残して、ふっと姿が消えた。

「あっ！」
俺と篤師は、慌ててしっとりちゃんを掴もうとしたが、
俺たちは、誰もいない空を掴んだだけだった。

「しっとりちゃんは、成仏されたコン」
灯火は言った。

「嬉しすぎて・・・魂を、この場に留ませる事が出来なくなった様コン」

灯火の護衛が続けて言った。

「嬉しすぎて……か」

篤師の声が聞こえた。

もう会えないんだ……と思うと、俺は涙が出てきた。

つづく

線香花火が火花を散らしている間の出来事

『川辺』【伊織】

「伊織の、どSぶりにも困ったものね。
私が、どMじゃなかったら完全にいじめだよ」

私とリノ君は、川辺でキャンプを張っていた。
山の奥の方で誰も来ない場所なのに、
2人の時間を邪魔する奴は生徒会会長の生霊。

「この生霊、なんで全裸なんだろう」と思ったら、
私がスケートリンクの物置に、裸で閉じ込めたからだ、
と気づいた。

生霊とは言え、リノ君の前で裸になるのはやめて欲しい。
まあ、リノ君には見えないけど。

リノ君は、線香花火をじっと見つめている。
線香花火が良く似合う少年。

リノ君を見つめる私に、生徒会長の生霊が言った。

「しっとり工兵ちゃんが、
篤師と武史に会った後に成仏したよ」

生徒会長の生霊が言ったからと言って、
本人の自我意識が、
その事を認知しているとは限らない。
生霊とは、限りなく無意識に近い存在だから。

「そう・・・良かった」

うん、ホント良かった。
遺恨を残したまま彷徨い続ける霊は最悪だ。

私は、しっとりちゃんを、
抱きしめた時の感触を思い出した。
一生忘れないよ、この感触。

篤師と武史に会ったと言う事は、あっちの空間で、
篤師と武史は、何らかの解決策を見つけたに違いない。

頼りになる、しっとりちゃん・・・ありがとね。
あなたを頼ってよかった。安らかに眠ってね。

私が、しっとりちゃんとの思い出に浸っていると、
彷徨える生霊が言った。

「もう降参だから、私たち生徒会役員を助けて・・・」

「これだから、現場を知らない生徒会役員は・・・
もうちょっとサバイバル能力を身に付けて欲しいよ。
私たちなら、その程度難なく脱出できるのに・・・
まあ良いわ。脱出方法を教えてあげる。
物置の上にある換気口を通ると、
スケート部のシャワールームに抜けられる。
シャワールームのロッカーに、あなた達の制服を置いといたわ。
スケート部の朝練が始まる前に、そこまで辿り着いて、
作戦成功の祝杯用に、冷たいストレートオレンジジュースと、
焼きそばパンを3人分置いといたよ、
青いクーラーボックスを空けてね」

私が言い終わると、生徒会長の生霊はすっと消えた。

「健闘を祈る」

私が呟くと、リノ君が持っていた線香花火の火が地面に落ちた。

つづく

しょぼい作戦

『陸軍航空基地・独身寮・あきらの部屋』【あきら】

飛行訓練から戻ると、俺の私物が無くなっていた。
誰かの悪戯かと疑ったが、幸運な事に、
俺の隊にそう言う事をするタイプの奴はいない。

冗談でやったとしても、
私物だけ盗むなんて、意味がわからない。

家から持ってきた漫画と小説。
親から持たされた家族の写真。
私服のTシャツにジーンズ。
レザーのコートにレザーのパンツ。
俺専用のマグカップまで無くなっている。

これは、誰の意思だ？
航空隊？
軍？
防衛省？
政府上層部？
それとも、隊の仲間？

「ビリヤードの続きしようぜ」
と言いながら、入ってきたのは俺の隊の仲間たち。

俺の私物が無くなっているのを見て、
一応に驚いていた。
演技の出来る奴らじゃない。

となると、軍？
あの少女撃たれた動画が広まってしまったから？
実行した俺が邪魔になった？

軍による国内治安維持活動は、
批判も多いと聞いたことがある。

支給品はあるのに、俺の私物だけがない。
俺はもう用無しって事？

『あきらの部屋・ベッドの下』【佐織】

「狭いから仕方ない」を口実に、
忍と栗栖が両側から私の身体を弄んでいる。
作戦中だと言うのに、欲望を抑えられない変質者の2人。（ため息）
こいつら、段々触るのが上手くなってきてる。
だから、接触者検定3級を上げる事にした。

今回の作戦内容は、あきらの私物を盗むこと。
私たちのバックの中には、あきらの私物が入っている。
美少女怪盗団にしては、しょぼすぎる盗品だ。

しかし、私たちの本当の目的は、物ではない。
あきらの心だ。あきらの心に不信感を植え付ける事。
陰謀と言うには、しょぼすぎるが、
成果は、後になってからのお楽しみ。

個人小さな心の傷が、組織の大きな傷へと発展する。

些細な傷を探りあい、傷つけあう、これが私たちの住む世界。

栗栖先輩の手が、私のお尻に触れた時、
ベッド下に、闇の空間が現れ、
私たちは落とし穴に落ちるように、
闇に落ちていった。

つづく

『ワンルームマンションの一室』【未紗（みーしゃ）】

バサって音がしたから、
ベランダを見たら鳶がとまっていた。

「可愛い」

と思って窓を開けたら、鳶が

「お邪魔します」

って言いながら入ってきたの。
礼儀正でしょう。それでね、今度は

「お風呂、先に頂きます」
って言いながら、お風呂に直行。
ホント、礼儀正しいでしょう。

お風呂からは、
バサバサバサって水浴びをする音がしたわ。

そしたら、お風呂から出てきたのは、
もう私の理想そのものの人間の男子だったわけ。
もう私、ポーーってなっちゃって。
完全に一目惚れしちゃった。

羽が有ったし、いつも団扇持ってたし、
「僕、天狗です」とか変な事言ってけど、
めっちゃタイプだったし、
これを逃すと永遠に、
運命の人には一生出会えない。
とか思っちゃって、思い切って、抱かれちゃった。

と言っても、すぐに抱かれた訳じゃないのよ、

ちゃんと『3ヶ月ルール』は守ったよ。

私の話を黙って聞いていた伊織は、
まだ目立ってはいない私のお腹をさすった。

佐織の方は困った顔して呟いた。

「15で妊娠・・・」

でも、2人に話せて良かった。

2人ならなんとかしてくれるはず・・・

「それも天狗の子・・・」

「えっ？伊織は彼の冗談を信じてるの（笑）」

伊織と佐織は、なんか驚いた顔して目を見合わせた。

「ん？・・・どうしたの？」

つづく

『フィギア部・部室』【伊織】

「いおりん、可愛い————！」

「いおりん?!」

黄色い声援に迎えられながら、
私はフィギア部の部室に、生徒会役員と入った。

こっちはフィギアスケートではなく、人形の方のフィギア。
場所は、スケートリンクの観客席の上にある。

スケートリンク場に、
フィギアスケート部ではなく、フィギア部・・・

なんの駄洒落よ！

生徒会役員全員で、どや顔をしたが、軽くスルー。

窓からは、リンクを見下ろせる。
フィギアスケートを見るには特等席かも知れない。

私は、滑れないのにフィギアスケートの衣装を着せられ、
フィギアの人形のモデルを、やらされるらしい。

そして、フィギア部部室には、
明らかに滑れなさそうな、フィギア部部員がみんな、
フィギアスケートの衣装を着て私を待っている。
私一人がフィギアスケートの衣装だと、
恥ずかしがると思っての配慮らしいけど、
地味目なフィギア部部員が、
その地味さに気づいたのか、
フィギア部員12名が物凄く照れまくっている。
よせばいいのに、衣装は派手で過激。
たぶん、自分たちで作ったのだろう。

それをフォローするためか、地味な顔には、
派手なメイクが施されていた。完全に逆効果だけど。

スケートの子たちと違って、
他者に見られ慣れてない子たちの、
ぎこちなさに私は、萌えた。

とりあえず、どSな私は、
部室にあった高そうなカメラで彼女たちを激写。
ふっ、これをネタにすれば、彼女たちから一生金を脅し捕れるぜい。

しかし、脅しづらくさせる要素が1つ。
それは、このフィギア部が、
別名、【ファンクラブ・伊織親衛隊】だと言う事。
さすがに、自分の親衛隊は脅しづらい・・・

部室には、あらゆる種類のコスプレをしている私のフィギアから、
全裸の私のフィギアまで、
多様多様な格好の私のフィギアが並べてあった。
全裸の私の人形に触ると本物と質感が一緒に柔らかかった。

「どういう素材？」

説明されたけど、文系の私には難しくて・・・

そして、今回はファンの集い。

なぜ私が知らない私のファンクラブの集いに、
私が出なくちゃいけないのか疑問点が多々あった。

生徒会長はその疑問に答えてくれた。

「マネージャーは通している」

「マネージャー？」

「佐織さん」

「佐織が！なんで・・・勝手な！」

確かに、佐織は【チーム織姫】の、
マネージャ的位置にはいるけど、
いつから【チーム織姫】は、
芸能プロダクションになったのよ！

「それとこの子達、
伊織の兜や甲冑、コーティング衣装を作ってるのよ」
「あ・・・それは、どうも・・・」

なるほど、めるかとり要塞の工兵が保有する技術を、
この子たちは、趣味に使ってるわけね。
そりゃあ、肌の質感まで似せられるわ。

「でもいいの、顔見せて？」

工兵は、賞金稼ぎの私たちと対面するときは、
要塞規約上、覆面マスクを着用しなければならない。

「ファンだからいいの。」

と説得力のない言い訳・・・
人の事言えないけど・・・
要塞規約ってちよくちよく破られて事実。
大丈夫か？めるかとり要塞。
まあ、私もしっとり工兵ちゃんの顔見てたし。

「伊織に、ファンクラブの総意として、
この前撮影した動画を見せたらいいの」

正義感の強そうな初等部の子が、PCの画面をクリックした。

「この動画はまだ運営も知らないわ。
あそこ秘密主義だし・・・
情報は早めに知っておいて損はないわ」
生徒会長は説明した。

「フライング・ヒューマノイド？」

「そう」

空飛ぶ人型、

フライング・ヒューマノイドの情報は、ネットに溢れている。

当然と言えば当然なのだが、

だって私たちよく、篤師や武史をビルの屋上から射出して、

中空にある闇空間に突入させているから。

それを誰かが撮影してネットの流しているらしい。

「これ見て・・・何も着てない」

射出される篤師や武史は、

闇空間に突入するためのコーティングを施した、

油圧式の甲冑を、必ず着ているはず。

他の賞金稼ぎだって同じだ。

裸で飛ばしても、闇空間に入れないし、

失敗した時に着地もできない。

動画では裸の男が、

街の上空をゆっくりと旋回していた。

遠くて、よくは見えないけど、

顔は、中の上レベルだが、下は丸出し・・・

「鷲みたいでしょう」

初等部の子が言った。

明らかに、空飛ぶ変態にしか見えないのだが、

初等部の子の純粋な目から見ると、鷲みたいに見えるらしい。

ん・・・鷲？

ふっ、私の中で、2つの情報が繋がった。

つづく

『理事長代理室』【佐織】

「木更津、御殿場、練馬に不穏な動き・・・
泥棒猫をしてただけじゃないのね」

理事長代理の望月先輩はそう言いながらも、
不穏な動きに関する報告書じゃなく、
メイドの栗栖が再生している映像をじっと見ていた。

例のフライングヒューマノイド。
別名・空飛ぶ変態。

「お知り合い？」
私の問いに、望月先輩は無言のままだった。
それが答えらしい。
「それ以上問うな」と言う目で私を見た。
私はそれに従ったが、メイドの栗栖は違った。

「理事長代理・・・別れた恋人を見る様な、
哀しい目をしてますけど、大丈夫ですか」

栗栖の発言後すぐに望月先輩を見ると、
これ以上ないくらい動揺していた。

私は
「えっ!？」
とつい声を上げてしまった。

その声に、望月先輩はすぐに反応した。
「そんな訳ないじゃない！こんな得体の知れないものと、
空想にも程があるよ」

私の思考回路はすぐにフル回転し始めた。
望月先輩は、少なくともこの変態の事を何か知ってる。

要塞には人に何も着けずに、飛ばせる技術があるのか？

そして、栗栖の言ったことも捨てがたい・・・。

「私は、佐織一筋なんだから」

そう言われながら、私は抱き寄せられキスで口を塞がれた。

「私も！」

背後で栗栖の声がした。

そして、栗栖は私のスカートの中に潜り込んだ。

こいつらの変態度数が増してる。

しかし、その程度で私の思考回路を止められる訳もなかった。

キスされながらも、私は、

何かを理解したかの様に不適に微笑んだ。

その微笑に、望月先輩は怯えた。

張ったりの微笑みだったけど効果は有ったみたい。

「辛い別れだったみたいですね」

私の言葉に、望月先輩は一瞬何かを思い出す様な目をした。

さらに私は攻め立てた。

私が望月先輩の頭を撫でてあげると、先輩は目をうるっとさせた。

決まりだ。衝撃的な決定稿。

真実をまた1つ手に入れた私の中に沸き立つ、この勝利感！

私はスカートの中に潜っている栗栖に、

突破口を開いたご褒美に、

好きなだけ私のフェロモンをあげた。

なんだろう栗栖と私の関係・・・

恋人や友達とは違う関わり方。

まるで花と蜜蜂や、

イソギンチャクとクマノミの様な生物的な繋がり。

「さあ、私のフェロモンをあげるから、私を癒して栗栖」
って感じ。

数分後、股旅を嗅いだ猫の様に、
栗栖はフラフラと床に倒れこんた。

フェロモンだけで、この状態に追い込める私って何者？
自分が不安になった。

補足：木更津、御殿場、練馬の不穏な動きは、
私たちが思っている以上の速さで動いているみたい。

つづく

『高層マンションの1室』【康僊】

炎天下の真昼の空を急降下する鳶は、地上すれすれで天狗へと姿を変えた。そして、瞬時にサーベルを抜くと、車から降りようとした要人の首を刎ね、その刎ねた首を持ち、そのまま上空へと急上昇し、ふっと姿を消した。

地上では、首を失った要人から血が噴出していた。

その場にいた護衛の兵士自身、何が起こったのか理解するものは誰もいなかっただろうし、例え「天狗に襲われた」と話した所で、誰も信じないだろう。

僕の隣で博司は、その一部始終を望遠レンズですずっと撮影していた。

僕らの知らない所で、何かが動き始めているのは確かだ。

つづく

冷たいダージリン

『理事長代理室』【佐織】

アロマオイルのいい香りが漂う中、
理事長代理の望月先輩は物騒な話をした。

「殺されたのは海軍参謀本部議長。
政治的発言がやたら多かった男。
これで、海軍は陸での政変には干渉しない。
混乱は最小限に抑えられる」

「私には、めるかとの要塞の立場ってのが、
よく解らないんですけど」

私は、針の施術用ベットに開いた穴から床を眺めながら、
理事長代理の望月先輩に聞いた。

床もピッカピカに磨かれると、ある種の芸術品に見えてくる。
たぶん、磨いたのはメイドの栗栖だ。

今、私の背中には針灸用の針がたくさん刺さっているはずだ。
痛みはないけど、想像したくはない光景だ。

でも、身体に溜まっていた疲労が、
すーっと流れていくようで気持ちがいい。

「幸せ～、死ぬときは、栗栖、
佐織さんのお尻を抱きながら死にたい」

メイドの栗栖の幸せそうな声が、私のお尻付近から聞こえた。
そして、明らかに頬ずりしている感触。
それも栗栖と望月先輩2人の頬ずり。

「迷惑ですから、よそで死んでください」

「栗栖のファーストキスを捧げたお尻なのに！」

「そんな事、言われても・・・」

「久しぶりのフェロモン補給・・・生き返るわぁ」

「望月先輩は、質問に教えてください！」

「う～ん」

本気でフェロモン補給をした望月先輩は、
ちょっと変なテンション。

そして、望月先輩とメイド栗栖は、
私の太ももを抱き枕に、深い睡眠に落ちていった。

「望月先輩！栗栖先輩！」

昼下がりの理事長代理室では、
私のフェロモンに酔った2人の、
幸せそうな寝息の音だけが聞こえていた。

「先輩一、私の背中に針が刺さったままですよ！」

私の声は、幸せな2人には届かなかった。

この時すでに、針が抜かれていたなんて事を知らない私は、
背筋を異常に緊張させ続けた為、
背筋が筋肉痛になった事は、言うまでもない。

「日頃の疲れを癒してあげたい」と言ったのは、
望月先輩なのに・・・

まあ想定範囲内だけど。

とりあえず、栗栖先輩が用意した水分補給用の、

冷たいダージリンをストローで飲んだ。

「美味しい」
私は一人、呟いた。

つづく

彼女は、葡萄酒をご所望らしい

『理事長代理室』【望月】

針灸の施術用ベットに横たわる佐織が、
まるで生贄に捧げられた殉教者に見える。

佐織のフェロモンによって、陶酔状態の私は、
佐織の裸体に山梨産の葡萄酒を掛けていた。

「戦国期の甲斐に、
葡萄酒があったかは知らないが、
彼女は、葡萄酒をご所望らしい。」

私は独り言の様に呟いたが、
自分でも何を言ってるのか理解できない。
そもそも、なぜ自分が
佐織に葡萄酒を掛けているのかも理解できていない。

「望月先輩、やめて下さい、冷たいです！」

葡萄酒を掛けられた佐織が、ギャーギャー騒いでいる。
その声が、佐織のフェロモンにやられた私の脳に木霊する。

愛しい人のその声が、私の心を締め付ける。

栗栖が私に、葡萄酒が注がれたグラスを差し出した。

「飲め」って事らしい。
私は差し出された葡萄酒を、のどの奥に流し込んだ。

すると、佐織のフェロモンと葡萄酒にやられた、
私の思考回路が、遠い昔の誰かの記憶と接続した。
私の心に、知らないはずなのに懐かしい何かが流れ込んだ。

つづく

行ってしまった望月先輩

『理事長代理室』【佐織】

どこからともなく現れた忍者のコスプレ姿の忍が、私の身体にタオルを掛けてくれた。

忍者のコスプレ・・・逆に目立つだろう、それ！

でも、とりあえず、助けに来てくれたから、ご褒美のキス。

忍は嬉しそうに照れ笑った。

うん、可愛い♪

だから、もう一回キス。

忍の救出に、私がホットとしたのも束の間、望月先輩がなんか変・・・

「ツングースの巫女が封印を解いた・・・」
陶酔状態の望月先輩は、部屋をうろうろしながら呟いた。

望月先輩の表情がいつもと違う。
この神懸り的な表情・・・なんだろうこれ？

「危ないんじゃない？」
「大丈夫です」
メイドの栗栖は即答した。

まったく大丈夫そうには見えない望月先輩の表情。

望月先輩は宙を見つめたまま、そこに誰かが居るかのように相槌を打っていた。

どうしよう・・・
望月先輩が無理やり私のフェロモンを嗅いだと言え、私のフェロモンの結果だし・・・とりあえずほっとけない。

1人だけ平常運転中の栗栖は言った。

「待ちましょう・・・この場所は、
佐織さんのフェロモンが充満している楽園。
それを目印に、理事長代理は必ず戻ってくると思います」

なんか勝手に楽園にされた・・・ちょっと迷惑かも。

つづく

投稿者不明の動画 4

『路上』【投稿者不明】

動画タイトルは、「天狗の仕業？」

政府要人が車から降りようとしていた。

何かの異変に気づいたSPは、要人を車に押し戻そうとするが、空から急降下してきた、

羽が生えたかのように見える人影に蹴飛ばされ弾き飛んだ。

次の瞬間、要人の首は消え、血まみれのSP達が、

上空に向けて拳銃を乱射していた。

時間にして30秒ほどのこの動画は、

アップされて1時間ほどで消去されたが、

他の動画サイトにすぐにアップされ、拡散した。

今のところ、この動画に対する政府のコメントはない。

2章 完了

投稿者不明の動画 5

『薄暗い路地』 【投稿者不明】

動画のタイトルは、
「正義の味方？殺戮者？ただの馬鹿？」

夕暮れの薄暗くなりかけた田舎道で、
空から舞い降りた天狗が、
4人の男たちに斬りかかった。

一瞬の出来事に、男たちは、
何が起きているのか判らない表情のまま、
斬殺された。

その様子に驚いたのか、
男たちが乗っていたと思われるワゴン車が急発進した。
天狗は飛翔し、そのワゴン車を追った。

天狗とワゴン車が去った後の現場には、
4人の男の死体と、
呆然と立ち尽くす女子生徒と、
倒された自転車が残されていた。

場面は替わり、真夜中の橋の上。
橋の上を歩く幾つかの人影が、
何かになぎ倒されるように、次から次へと倒れこんだ。

再び場面は替わり、夜空を飛行中の旅客機。
ファーストクラスの窓の外から、17歳くらいの少年が、
「ここ開けて」とジェスチャーで、
キャビンアテンダントに嘆願していた。

「当機は飛行中なので、開けることはできません」

キャビンアテンダントの声が客室に響いた。

「じゃあ携帯の番号教えて」

窓の外の少年はジェスチャーで聞いてきた。

仕方なくキャビンアテンダントが、

窓に携帯番号の書いたメモを提示すると、

窓の外の少年はニヤリと笑うと、ふっと夜の空に姿を消した。

夜路詩句誰得

『高速道路』【相越】

速度が250キロを超えてるバイクの後ろに乗るのは、
さすがに怖い。

俺は必死で、白バイ隊の白雪にしがみ付いた。

女の色気いっぱい白雪の身体は、
とても柔らかく抱き心地は最高だ。
体と体のフィット感が、良いんだ。
体の相性最高、このまま死んでもいいくらい。

白雪は、250キロの速度にも関わらず、右手で警棒を掴んだ。

「おい待てよ・・・」

バイクの爆音の中、俺の声が届いた形跡はない。

白雪はバイクを、追跡中の暴走車両の横に着け、
警棒でサイドミラーを叩き壊した。
暴走車両の怒り狂った住人は、拳銃に手をかけ、
俺たちに向けて発砲してきた。

当然の反応だ。
奴らは賞金稼ぎを名乗る暗殺テロ集団【ダレトク】だ。

ふざけた名前だ。ホント誰得なんだよ！

発砲直後、バイクは減速し、弾丸をかわした。
前方へ遠ざかっていく、【ダレトク】を見ながら、
ホッとしたのもつかの間、バイクは再び加速した。

「まだ追う気かよ！援軍を待とうぜ」
俺は叫んだ。

まさか、こんな目に会うとは・・・、
初対面の彼女に、冗談のつもりで

「ピザまんおごるから、コンビニまで乗せてって」
と頼んだだけなのに。

通称・白雪。

彼女は警視庁から国家憲兵隊に出向してきた。
賞金稼ぎの案件が、国家憲兵隊の管轄になったため、
増員要因として配属されてきた。

賞金稼ぎが国家憲兵隊の管轄になったと言う事は、
奴らの支持者が政府内にゴロゴロいるって事だ。
国家憲兵隊が属する内務省だって、例外ではない。

【ダレトク】は車から身体を乗り出し、拳銃を構えた。
対する白雪も、両手で拳銃を構えた。

「えっ、両手で構えた？手放し？おい、ハンドル持てよー！」

バイクに何か当たり、俺の身体に衝撃が走った。
俺に、その後の記憶はない。

つづく

『国家憲兵隊病院』 【相越】

目を覚ますと、そこは病院の個室だった。

高速で事故ったのだろう。

肋骨が痛む。

白雪は大丈夫だろうか？

俺の腕はロープでベットに縛り付けられていた。

「どういう事？」

俺は、ベットの横に立っている白衣を着た女医に聞いた。

研修医だろうか。年齢は10代くらいに見えるけど。

「どう言う事って？あなたと白雪が、私の家臣を傷つけた。

だから、私はダレトクの女王として今からあなたを罰しなければならない」

何、言ってんだ？この女医、

言動から変態だと言う事だけは解るが・・・

ダレトクって、あのテロリスト？

「おい、誰か、誰か来てくれ、ここにテロリストが！」

「それでいいの？あなたが今罰を受けなければ、

つつるお肌の白雪さんが罰を受けなければならないけど、

よく考えてから行動したら、

今、あなたが置かれている現状とか、

私がここにいる現状とか」

「あんたが、ここにいる現状？」

「あんたが？女王さまとお呼び！この下郎！」

ダレトクの女王さまはそう言うと、手にした鞭で俺の胸を打った。

俺、肋骨折れてるのに・・・

「ここは、前線なき戦場なのよ」
女王さまは付け加えた。そして、白衣を脱ぎ捨てた。
白衣の下には、白いパンツに白いブラジャー。

しかし、女王さまのどや顔から推測するに、
多分、彼女は、所謂、
女王さまらしいレザーの黒もしくは赤の下着を、
着ているつもりらしい。

それを指摘する暇もなく、女王さまの鞭が飛んだ。
痛い・・・ここで快感を感じないと言う事は、俺はどMではなさそうだ。

「女王さま・・・1つ進言ですが・・・」
「進言？」
「とても純白のパンツがお似合いです」
「純白のパンツ？」

女王さまは、自分の白いパンツを見ると、身体を赤らめさせた。

素に戻った女王さまは、白衣で身体を隠し
「この、ど変態！」
と言葉を残して走り去って行った。

言われなき言いがかりにも程がある。

前線なき戦場か・・・女王さまは、
厳重な警備の憲兵隊病院に難なく侵入してきた。
敵はこの病院内にもいる。

そう考えると、ドッと疲れが出た。

白雪は大丈夫だろうか・・・

俺が罰を受けなければ、
白雪が受けるのか言ってたけど・・・

つづく

赤と白

『参道通りの漬物屋』【相越】

神社の参道にある、
決して繁盛しているとは言いがたい店に入ると、
漬物の匂いがした。

店先には、駄菓子や清涼飲料水が並べられ、
店の奥には、びっしりと漬物の壺が並んでいた。

店番は、白雪の妹と思われる小学5・6年ぐらいの、
少女がしていた。
店の制服なのか、少女は着物に白い割烹着を着ていた。

ちょっとダサメ・・・

一目で、俺が客でないことが解ったのか、
少女から満面の営業スマイルはすぐに消えた。
俺、私服なのに感の鋭い少女だ。

そして、この程度の子どもに、
見破られる内務省調査部員の俺・・・報告書には絶対書けない。

「お姉ちゃんの何？」

店番のガキ・・・違う白雪の妹さんは俺に単刀直入に聞いた。

「同僚です」

俺は無難に答えたつもりだったが、
「私、【チーム織姫&彦星】推し、だから、
国家憲兵隊員を刺す事には躊躇しない派」
と宣戦布告された。そして、妹さんは
番台の下に隠してあった包丁をちらつかせた。

【チーム織姫&彦星】

ネット上で騒がれてる賞金稼ぎのテロ集団の名前だ
やれやれ殺伐とした世の中だこと・・・

「君のお姉さんも、国家憲兵隊なんだけどね・・・」

「お姉ちゃんは、騙されて、

無理やり、やらされてるだけだから良いの・・・

後、私、お姉ちゃんを汚す奴を刺すのに、

躊躇しない派だから、覚えておいて、返事は？」

「はい、はい」

「返事は一回」

「はい、はい」

俺の返事に妹さんは本気で包丁を握った。

俺は慌てて

「はい」

と返事した。

「お姉ちゃんは、奥の階段を上がって奥の部屋」

と言って、包丁を番台の下に隠した。

物騒なガキだ。

店の奥には住居部があって、

その部屋の仏壇には、

まだ若い夫婦の写真が飾ってあった。

多分、白雪の両親だ。

俺は仏壇に線香を上げると、階段に向かった。

ふと後ろを振り返ると、

番台から心配そうに見つめる妹さんと目が合った。

するとすぐ、妹さんは視線を逸らした。

俺が背を向けると、すぐに背に視線を感じた。

(笑) 状態だ。

その視線を受けながら俺は、

現代建築ではありえない、

一段一段が高めの階段を上った。かなり古い造りだ。

2階の薄暗い和室には、窓から西日が入り、

博多人形や熊の木彫りやどこかの土産の人形を、

夕焼け色に照らしていた。

「何？」

疲れきった声がある奥の部屋に視線を移すと、
赤い腰巻に、バスローブの様に、
赤襦袢を羽織っただけの白雪が立っていた。

目は充血気味で、
疲労と狂気じみた険しさと怯えが同居していた。

「私・・・もう、生きるのに疲れちゃった」
「白バイ乗ってりゃ事故なんてよくある事だろ」
「そんなことじゃないの、そんなことじゃない！
何なのよ！私がこんなに苦しんでるのに！
何なのよ！」
白雪は、薄暗い和室で叫んだ。

いきなり「何なのよ！」って叫ばれたって、
こっちこそ「何なのよ！」だ。俺が反論しようとする、
白雪の充血した目から涙が零れたので反論停止。

「私をあげるから、あなたを私に頂戴！」

今度はプロポーズかよ！
こんな情緒不安定な状態で、ありえんだろう！
白雪は綺麗な顔立ちだけど、
ちょっとアレな性格に俺が大きく引いたのは事実だ。
「この場から逃げたい」のは本心だが、
「この状態の白雪もほっとけない」のも本心だった。

「落ち着けよ！」

「あなたを私にくれたら落ち着く・・・」

白雪が、本泣き気味だったから・・・
この際、嘘も方便と軽い気持ちで、
「解ったよ。俺をあげるよ」
と言った。すると白雪の泣き顔から笑顔が零れた。
白雪は、

「良かった・・・」

と呟くと、畳にストンと腰を下ろした。

俺も白雪に合わせて、畳に座った。

白雪の羽織っただけの赤襦袢の隙間からは、

胸の谷間と、鍛えられた腹筋と、

可愛らしいおへそと、柔らかそうな太ももが見えていた。

「私、夢を見てたの・・・」

「・・・どんな？」

白雪は、その黒い瞳で俺を見つめた。

「全部、壊しちゃう夢・・・こんな夢を見る私って怖い？」

俺の心臓は高鳴っていた。

恐さからじゃない、

彼女の乳房と可愛らしい乳首が見えたからだ。

そんな事も気にせず、白雪は話を続けた、

「でもね、私が見ていた夢って、

本当はあなたの物なの、だから・・・返すね。

私が持ってた、破壊願望・・・」

「白雪が持っていた破壊願望？」

白雪は、赤襦袢で俺を包み、俺を抱きしめた。

白雪の頬が、俺の頬に触れた。

「怖い？」

「ん？」

「私はずっと恐かったんだよ、自分が・・・

いいよね、あなたが私で、私があなただから、

あなたは私の魂の欠片・・・」

白雪の、狂気じみた声のトーンと言葉に、ちょっと引いが、

「俺をあげるよ」と言ってしまった以上、もう引けない。

好きにすればいい！

つづく

メガネ萌えする妖精

『メガネ萌えする妖精から、もらった空間』【相越】

白雪の柔らかな身体が、俺の身体を押した。

女に押し倒されるのも悪くない・・・とか、
思った次の瞬間、俺は周囲の異変を察した。

漬物屋の二階の部屋に居たはずなのに、
俺は冷たい石畳の上に寝転んでいた。

そして、意識が飛んだ様な感触・・・。

俺は、

「気を失って、どこか別の場所に連れてこられたのかも知れない」
と思考してみた。仕事上、そんな経験が過去に有ったからだ。

目の前には、俺をじっと嬉しそうに見つめる白雪がいた。

その表情から、危険な状況ではないらしい・・・

「ここはどこ？」

白雪に聞いた。

白雪は、その柔らかな胸を押し付けたま答えた。

俺の身体に掛かる白雪の身体の重さが、なんとも愛しおしい。

「子どもの頃に、

メガネ萌えする妖精に道を教えてあげたら、
お礼にももらった空間」

メガネ萌えする妖精！？

・・・いや、いい・・・今は触れないでおこう。

「私だけの小さなパラレルワールド的な空間よ」

「小さなパラレルワールド？」

「・・・的な空間よ。私にも、ここが何なのか良くわからないの・・・
ただ少なくともここはリアルよ」

白雪の、この言葉に対して、
疑った表情をした俺が悪かったのかも知れない。
抱きついていた白雪は、
心の中に持っているであろう破壊願望を解放した。

警官として護身術を身に着けた白雪に固められたら、
事務官出身の俺が自力で逃げる術などない。

「白雪に固められてる・・・強く抱きしめられてると取れなくも無い」

と、異常なほどポジティブな思考を最後に、
俺の意識は、ここで一旦途切れた。

つづく

狐に伝承された予言

『闇の空間・森の水辺』【武史】

俺は、しっとりちゃんを、心の奥に仕舞い込んだ。
そんな大切な儀式の最中、狐の灯火（ともしび）は言った。

「敵・・・あなた達にとって好ましくない敵が、あらわれたコン」

「好ましくない敵？」

「あなた達を追い詰めるようとする敵、
あなた達の仲間に害をなす敵、
あなた達を牢獄に閉じ込めようとする敵」

「敵」の言葉に、俺と篤師は目を見合わせた。
篤師の目に攻撃的な闘志が宿ったように見えた。
俺の身体の奥でも、闘志の炎が燈（とも）った。

「私達の古き伝承に
『敵がその油揚げを食す時、七味は一味と化するだろう』
と言う予言があるコン、今がその時コン」

俺が「意味が解らない」と言う顔をすると、狐の灯火は答えた。

「一種の寓話的予言コン」

「多分、深い意味があるんじゃないか」
篤師はそう言った。
深い意味なんてあるわけ無いじゃん。
しかし、篤師、大人な発言。

「敵のいる場所に、案内するコン？」
「敵のいる場所に、案内してコン」

篤師は語尾に「コン」を付けて答えた。

そして、ドヤ顔で俺を見た。

なぜドヤ顔？別にいいけど・・・。

俺達は、甲冑を纏い戦闘モードに入った。

しかし、電源の入っていない甲冑は、いと重しコン。

『南海の珊瑚礁』 【赤龍使い】

新月が、小さな船の上の少女の顔を照らした。

少女の顔に、どこか日本的な面影があるのは、
遠い昔の戦争で取り残された曾祖父の影響かも知れない。
兵隊だった曾祖父は、祖国に帰ることなく、この珊瑚礁の島で没した。

少女は、ワンピースを脱ぎ、
潜水器具など何も付けずに、
裸身で珊瑚礁の海へ飛び込んだ。

夜の海は静かで冷たい。
少女の肌が海に触れた瞬間感じた。

「今日だ、今日が門が開く」

村の長老によれば、門が開くには
月の輝き具合や、潮の引き加減、波の高さ、雲の流れ、
その他色々な条件があるのだが、
少女はその時を肌で感じる事が出来た。

海亀が少女を先導するように前を泳いでいたが、
きっと、行く方向が同じなだけだ。

少女は身体をイルカの様にくねらせながら、海亀の後を追った。
すぐに追いつくと海亀の背中を、ぽんぽんと叩いてみた。
海亀は驚く様子も無く平然と泳ぎ続けていた。

「行き先が同じなら・・・」

少女は、150センチ近い大きさの亀の背に跨ってみようとした。
しかし海亀の甲羅は丸みを帯びてるとは言え、平面に近く、乗りにくい、
だからと言って、首を掴むのも悪いし・・・。

「あっ！」

少女は、海亀の甲羅にちょうど掴みやすいへこみを見つけた。

「おお！」

良い乗り心地を獲得した少女の心は躍った。

海亀は、珊瑚礁の海をさらに深く潜り、珊瑚礁の壁の前で止まった。

「ありがとう」

まるで少女の行き先を知っていたかのような振る舞いの海亀に、

少女は礼を言った。きっと、偶然だろう。

少女は、珊瑚礁の前の壁に手を当てるとゆっくりと押した。

「あれ？」

いつもと様子が違う。

「やばい……」

潜ることに慣れている少女にも、息の限界が迫っていた。

今から戻っても間に合わない。

「酸素ボンベ持ってくればよかった。。」

海上を見上げると、月の光がわずかに届いていた。

その時、

「……ドーン……」

と珊瑚礁の壁の奥で何かが動いた。

手に僅かな振動が伝わり、

珊瑚礁の壁が重い門の様にゆっくりと開いた。

「もう来てるの？」

珊瑚礁の門を抜けると、そのすぐ上には空気のある洞窟があるはずだ。

少女は全速力で上昇した。

「ぷふぁー」

ここの空気は何処よりも美味しい。

そこは明らかに人の手によって整備された空間だった。

小さな体育館くらいの洞窟内には、

石の壁に石の床に石の祠があった。

神殿と言うには質素な造りだが、神聖な雰囲気は存在していた。

涼しげな雰囲気を漂わせる神殿とは逆に、

神殿の奥からは熱気が漏れてきていた。

神殿の奥の岸壁では、海の波が激しく岩に叩きつけられ、海流は渦を巻いていた。
その海に、赤いマグマの様なものが、流れ込んできた。
赤いマグマは、まるで龍の様に渦巻き何かを求めていた。

「お前が我が神体・・・」
少女の頬に笑みが零れた。

「お前に、我が身を授けよう。」
少女はそう言うと、赤いマグマに身を投げた。

身体が、マグマに触れる瞬間、毛が焦げる匂いがした。
だが不思議と熱さはなく、すんなりと少女は受け入れられた。

「行け北へ」
赤龍と化したマグマの中で、少女の思念はそう呟いた。

つづく